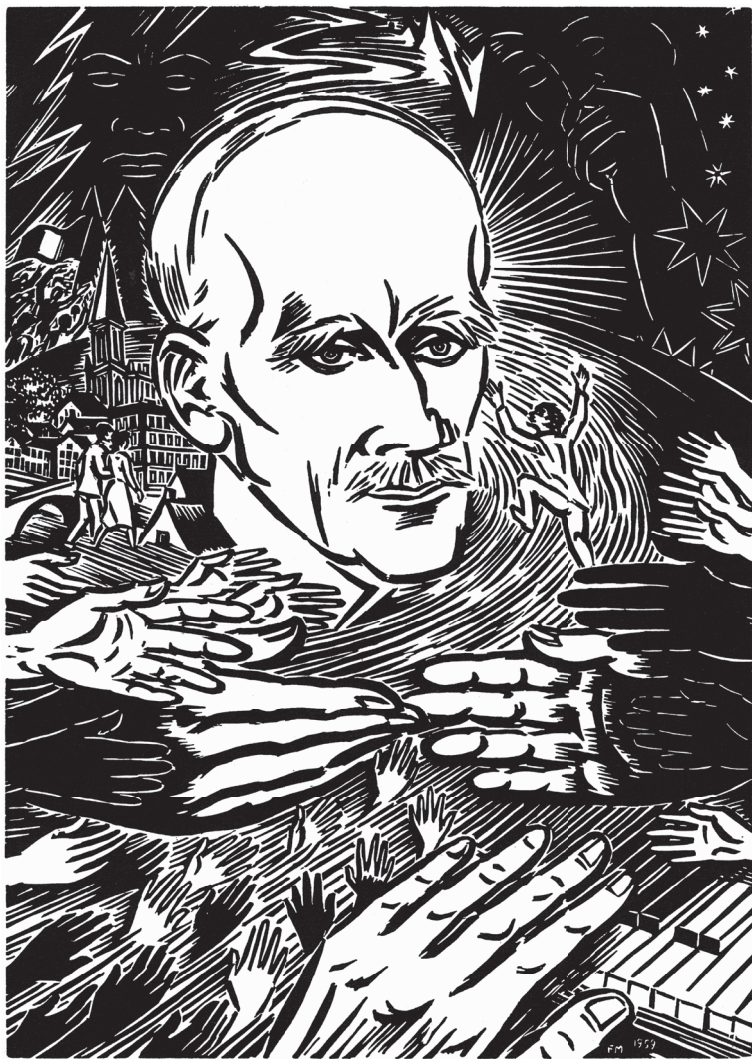


ユニテ

2020. 4

47



一般財団法人
ロマン・ロラン研究所

表紙 フランス・マスレール「ロマン・ロランを讀えて」(1959年)
(植松晃一氏寄贈)

目 次

時代の流れにあらがって

——大河小説の可能性

野崎 歓 …… 1

二〇一九年一〇月八日ピアノコンサートのトークセッション
ロマン・ロランを巡って ……

I・メジエーエワ
西成 勝好 …… 27

『ジャン・クリストフ物語』発刊にあたって

植松 晃一 …… 30

フランス・マスレール木版画入り『ジャン・クリストフ』の原書を求めて

植松 晃一 …… 31

ジャン・クリストフ物語 読後感

植松 晃一 …… 32

『ジャン・クリストフ物語』を紹介して

久保 ひさ子 …… 35

『コラ・ブルニョン』出版一〇〇周年に寄せて

四宮 ころろ …… 37

ベルナルル・デュシャトレ先生 追悼

宮本 エイ子 …… 42

ロマン・ロラン研究所便り

短信	46
読書会報告	47
訃報	48
研究所設立趣意書	49
研究所の活動	50
二〇一九年度 賛助会員、寄付者名簿	58
寄贈図書	59
編集後記	60

時代の流れにあらがって

— 大河小説の可能性

野 崎 勸

少女少女のための世界文学

みなさんこんにちは。総領事からご紹介いただき大変光栄に存じます。

今、総領事が野崎さんは若いころ『ジャン・クリストフ』をお読みになって感動なさったとご紹介くださいました。ずいぶん昔、一〇歳ぐらいの時でした。ただしそれ以来、ロマン・ロランに打ち込んできたというわけではありません。今日、「ロマン・ロランの友の会」の七〇周年記念の集いで講演させていただくのは、僕にはあまりに重い務めなのです。

でも同時に、僕は日頃から「文学はアマチュアのものである」というひそかな主張をもっております。専門としてフランス文学をやってきましたが、専門に閉じこもるのではなく、できるだけ広い読者の層とふれあいながら読む楽しみを共有できたらいと思うのです。自分自身、一介のアマチュアとして素手で読んで行くのが一番楽しいと思っております。

この春にいわゆる還暦を迎え、勤め先も早期退職をするといったことがありまして、いやでも自分の人生を振り返る機会となりました。なぜフランス文学をやったのだらうと考えると、根本には『ジャン・クリストフ』があったの

かもしれないという気がしてきたのです。そのことをあるところでお話ししたところ、ロマン・ロラン研究所の皆さんのお耳に入って、今日ここにお招きいただいたという成り行きです。

ご指名をいただいてから、まさしくにわか勉強ですが、この一年間はロマン・ロランを集中的に読んで予習してきました。長い間ロマン・ロランと付き合っただけでこれだけの皆様にはもの足りない話になるかと思いますが、何も知らない読者としてフレッシユにロマン・ロランを読むとどうなるかという話に、しばしお付き合いいただければと思います。

まずは子どもの頃、ロマン・ロランとどういう出会いがあったのか。それは家にあった小学館版『少年少女世界の名作文学』のおかげです。そういう児童向け世界文学全集を昭和三〇年代に主な出版社が軒並み出している。いずれも全五〇巻という堂々たるシリーズです。これを子どもに買わせることが、かなり広い家庭でなされていたと思います。各巻一冊五〇〇ページくらいあって、子どもにとっては結構重たい本なのですが、中を開けますと、いわゆる泰西名画ですね。西洋の美術作品などがカラー口絵で載せられている。装丁も金箔押しで、なかなか豪華な本だったのです。

自分が読んだ『ジャン・クリストフ』は、いったいどなたの翻訳だったか。約半世紀ぶりに図書館で調べてみたら、「ロマン・ロラン原作、新庄嘉章訳、大穂利武文」となっていました。新庄嘉章はジツドの翻訳などで知られる早稲田大学の仏文の先生で、さまざまな作家たちと交流のあった方です。その後記されている大穂さんというのはどういう方なのか。

そこには分業体制があつて、翻訳を小学生向けにかみ砕いて書き直した。リライトしたということだと思います。この本は小学校三年生から六年生向けとあります。いわば翻訳をさらにもう一回翻訳しているわけで、手間がかかっているんですね。それだけの手間と愛情をかけてくれなければ、小学校三、四年生で『ジャン・クリストフ』を読めるわけがない。

それが僕にとつては大事な思い出です。一気に読めたという経験が大きかった。読み終わったとき、家は五人家族でしたが、家族がみんな先に寝ていたのを覚えています。誰よりも遅くまで一人で本を読んでいた。ふつと気が付いたら自分だけが『ジャン・クリストフ』の波乱万丈の世界をめぐって、そのただ中で別の人生を生きていた。その興奮が忘れられないわけです。読書というのは、たった一人で思いもよらぬ遠くまで行き、未知の経験を味わうことだと初めて知った。それは『ジャン・クリストフ』のおかげだったと、掛け値なしにいうことができます。

今回、宮本正清先生の『ジャン・クリストフ物語』に宮本エイ子さんが手を入れて、まさに手塩にかけて本にされた。²あとがきを拝見すると、正清先生は『ジャン・クリストフ物語』の初版を一九二六年に出しておられる。今から九〇年以上前のことになりますが、そのころからすでに『ジャン・クリストフ』は子どもたちの一種のアイドルでなかったかと思われまます。宮本先生は一八九八年のお生まれですから、二〇代でのお仕事です。日本で『ジャン・クリストフ』やロマン・ロランを紹介した最初の訳者たちは、いずれも非常に若かったことに驚きます。勢いを感じますね。二〇代あるいは三〇代始めに巨大な小説に挑んで翻訳し、長く読者に愛される仕事となった。実際、読者の反響は大きかったのでしょうか。

デュシャトレの内容豊かな伝記『ロマン・ロラン伝』が、みずず書房から二〇一一年に出ています。今日、お話しすることも多くはこの本で予習してきたことなのですが、訳者の村上光彦さんが、あとがきにこう書いていらっしやる。

「わたしが戦後まもなく旧制高等学校に入学したころ、ロランの著作は生徒の必読書と見られていました。学校の図書館には後藤末雄訳『ジャン・クリストフ』〔一九一七―一九一八年〕も所蔵されていたのに、借りたくてもいつも貸し出し中でした」いかに広く読まれていたかがわかります。後藤末雄は一八八六年生まれで、彼の訳は一九一七年に出ていますから、三〇歳そこそこの訳業だった。その人気はさらに、子どもにまで伝わっていたわけなのです。

人生の「朝」の瑞々しさ

過去の人気、栄光は疑い得ないとして、では今読んでみたらどうなのかということをお話したいと思います。

『ジャン・クリストフ』の今すぐに手に入る岩波文庫は、豊島与志雄訳です。豊島さんはやはり岩波文庫の『レ・ミゼラブル』などで知られる翻訳家ですが、一八九〇年生まれで、『ジャン・クリストフ』の翻訳を出したのが一九二〇年。それがいまだに健在なんです。豊島訳で読んでみると、なんだか『レ・ミゼラブル』にとても似ている気がしてくるんですね。翻訳家の言葉遣いや文体が共通しているという点もあるでしょう。しかし同じ訳者が訳したことで、『ジャン・クリストフ』に脈打つヴィクトル・ユゴー的なものがまざまざと感じ取れる訳になったという面もあるのではないのでしょうか。つまりロマン・ロランはひよっとすると、ヴィクトル・ユゴーに直結する作家なのではないか。まず、全体の構成を概観しておきましょう。全一〇篇で、第一編が「曙」。いかにも大交響曲の始まり、立ち上がりを感じさせます。まず夜が明けるところから始まる。そうするとこれは必ずや、夕方から夜まで行くだろうと予想させます。構えからして大きい、ある全体を描き出そうとする野心が感じられます。

冒頭のところはとりわけ有名ですし、今豊島訳で読んでも優れた導入部だと思います。

「川の水音は家の後ろに高まっている。雨は朝から一日窓に降り注いでいる。窓ガラスの亀裂ひびのはいった片隅には、水の滴りが流れている。昼間の黄ばんだ明るみが消えて行って、室内はなま温かくどんよりとしている。赤児あかこは揺籠の中でうごめいている」

文章が古びていないですね。「川の水音は家の後ろに高まっている」という具合に現在形の描写によって、ある意味映画的に書かれています。実際には、ロランの小説は映画的な書き方の対極にあるといえるでしょう。観念的な側面が強いからです。理屈を述べる部分が多く、映画的な外面性、表層性からは遠い印象がある。けれども冒頭はこのとおり、すっと場面に入っていくように書かれています。生まれたばかりのジャン・クリストフの命が流動し始める

ような見事な冒頭だと思えます。

そこから次々に登場人物たちが出てきます。彼らに即して物語の展開を見ていきましょう。まず、母方の祖父ジャン・ミシエル・クラフトが紹介されます。このあたりからすでに、この作品の特色が感じられます。今回、ロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』と『魅せられたる魂』を通読して得た大きな印象は、フランス小説としてじつに不思議な世界がここにあるということなのです。こういうフランス小説は他にちよつとない。ある種の異様さすら感じます。

その理由をいろいろと指摘したいのですが、まず一つはこのジャン・ミシエル・クラフトという名前。ジャン・ミシエルはフランス人の名前としてよくある名前です。クラフトというのはドイツ語らしい。調べてみると、力、パワーといった意味です。ジャン・クリストフの苗字としてはぴつたりなのですけど。パワーのあふれた人間ですから。つまり名前からしてすでにフランス語とドイツ語が合体した形になっている。これがまず独特の仕掛けになっているわけです。時代の流れに逆らう精神、つまり第一次大戦に向かいつつある当時の、独仏を分断する動きに抵抗する精神が、登場人物の名前に刻印されているのがわかります。

祖父に続き、母親のルイザが出てきます。それから父親、これが飲んだくれの音楽家で、ルイザに対しては暴君として振るまつている。稼ぎはみんな飲んでしまうので、ルイザが身を粉にして働き家計を支えるほかはない。さらにジャン・クリストフには二人の弟がいますが、二人とも影が薄い。どちらもあまりすぐれた人間にはなれないという感じですが。ロマン・ロランの小説はこういう風に、この人物はどんな人物かという判断をわりと早急に下していく感じがします。この第二人は駄目な奴だなということが最初にある。実際、最後まで駄目なんです。そのへんは意外と救いのない世界でないかという気がします。逆に、立派な人間はいかにもその気高さが色濃く感じられる描き方ですね。少年時代で特に印象に残る人物は、母親の貧しい兄のゴットフリートという人。ろくに教育も受けていない商人ですが、彼が出てくるシーンがとても味わい深い。その人柄が感動を与えてくれます。

ジャン・クリストフは宮廷に呼ばれて演奏したりして、すぐ鼻高々になる。そうすると音楽のことなど知らないはずのこのゴットフリートおじさんが、ジャン・クリストフに向かってこんなふうにいいます。

「お前は偉い音楽家になるために書いたな。ほめてもらうために……それじゃ嘘の音楽さ。音楽というものは、真情から自然に出なくちゃ駄目だ。ちょうど泉の水が池の中から湧き出るような……」「お前が家で書くものなんか音楽じゃありやしない。ほんとうの音楽というものは外の清らかな神さまの空気のなかにあるのだよ」

こういうセリフを幼いジャン・クリストフにおじさんがいう。とても重要な場面になっているわけです。ここで「神さま」という言葉が出てきますが、『ジャン・クリストフ』が全体として、どのような宗教観を提示しているかというのには難しい問題だと思います。ロマン・ロランという作家自身、伝統的なキリスト教の枠組みに収まる人とは思えません。この作品が書かれたのはまさに、フランスが国家として政教分離を実現した時期に当たります。それでもなおロランには、宗教的なるもの大切さを問い直し、作り直そうとする意志も感じられるのです。

ともあれ、ここで印象深いのは、音楽は家の中にはない、外にあるのだということですね。『ジャン・クリストフ』という小説が、たえず外へ外へと広がっていく、その魅力に直結する部分だと思います。印象派の画家が野原にカンバスを立てて描いたような解放感があるのですね。家に閉じこもってでは芸術はできない、芸術は内ではなく外にあるというおじさんの言葉が鮮烈に響く。しかもそれは水の流れのようにあふれ出すものなのだ。そういう、湧き出るものに対する一種の信仰が、この小説をずっと支え続けている気がします。

さてここまでが、ジャン・クリストフの少年時代です。ほかに、いろいろと忘れたいエピソードがあります。お母さんが料理人として働いているお屋敷に行つて、お屋敷の子どもたちと遊んでいると、クリストフが着ている服を見て「それは僕が着てたやつだ」と言われる。知らずして、そのお坊ちゃまのお古を着せられていたわけですね。それで馬鹿にされ、傷つけられる。こういうのは、子どもの心にも響くエピソードでした。

それからこれも、昔読んだときにとでも印象に残ったのですが、人づきあいのうまくないジャン・クリストフに初めて、オットーという親友ができます。そもそも、ジャン・クリストフは友だちがあまりいない。生涯そういう感じでした。彼には、われわれが一般的にいうような意味での友だちは必要ない。魂と魂を鍛えあうような、全面的に認め合うようなそういう友情のほかは拒絶する。そんな誇り高いジャン・クリストフと、最初の親友との交わりは、初恋の恥じらいや胸のときめきに等しいものとして描かれていて、なんとも瑞々しい。そのうち、今度は隣のお嬢ちゃんに恋をしたり、あるいは近所で暮らす未亡人に恋したりといったエピソードがあつて、徐々に子どもから大人になっていくわけです。

純粹さと反抗

ここまでで人生の朝は終わりになるのですが、この曙や朝方の初々しさには他に代えがたいものがある。ひよつとすると大長編で最もわれわれの気持ちを引きつける部分になっているのではないか。

そこで思い出されるのがジャン・ジャック・ルソーの『告白』です。あれもまた、長い長い物語ですが、とりわけ面白いのは最初の数巻でしょう。ルソーが生れ落ちると同時にお母さんが死んでしまいます。やがて時計職人に弟子入りますが、一〇代後半にジュネーヴを捨て、あてどなく放浪し、庇護者となるヴァランス夫人に拾われる。そのあたりまではじつに瑞々しく書かれています。でも、人生行路を進んでいくうちにだんだん苦しくなってくる。ルソーは迫害妄想気味で、また実際ひどい迫害も受けたわけでしょう。哲学者仲間からも仲間外れにされ、体の不調も増す一方。というわけで、読者としても一種、樂園追放の物語を読んでいる気分になってきます。

『ジャン・クリストフ』のように一人の主人公の人生を最初から最後まで描き出すとする小説は、多かれ少なかれそんな「ルソー問題」を抱えていると思います。子ども時代や少年時代が何といつても一番感動的で、ストレート

な魅力にあふれている。その後を一体どうするのかということですよ。これをどういう具合に解決するのか。

これは単に僕の印象ですが、ロマン・ロランの場合は、あまりその問題を感じておらず、解決の必要も感じていない。そこにむしろ、この作品の強さと純粹さが出ているのではないのでしょうか。つまり、よく『ジャン・クリストフ』は教養小説という側面を持つといわれます。教養小説とはゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』みたいな、何も知らない純真な青年が世の中に出て、経験を重ね知恵を得ていく。そういうパターンです。

でも、クリストフはあまり変わらないというのが実感なのです。中年になったクリストフも、少年の頃のように、ちょっと気にくわないことがあるとすぐ腹を立てるような、そういう子どもっぽさというか純真さ、これを失っていない。逆に、世間のたいいていの人間がいかにも「大人」かということが、彼の姿によって照らし出される。それで本当にかという問いを突き付けるのが、彼の役割なのではないかと思えます。クリストフが生まれながらもつ純粹さは、どこで切っても変わらない気がします。実際問題として、彼は結婚もしませんし、子どもを育てるとか、家を築くとか、そういう小市民的な部分がない。純粹な一生を貫くことのできた最大の理由は音楽です。彼が音楽に一途な男であるということですね。

青年になったクリストフは、作曲家として世に出ようとします。岩波文庫でいうと第四編「反抗」です。常に反抗の人なんです。クリストフは、印象的だったのは最初のコンサートで自作曲を自ら指揮する。ところが、ある女性歌手を押し付けられて、それが気にくわない。読者も、これは絶対に何かトラブルが起こるなと思う。そうすると案の定、クリストフは指揮をしながら我慢ならなくなつて、演奏を止めさせる。「やり直せー」といつてコンサートの途中で歌をやり直させます。みなさん、そういうコンサートを聞いたことがありますか。まあ例外的な、クラシック好きな人たちのいわゆる「事故」というやつですね。クリストフはそれをデビューのときからやっています。

というわけで、音楽家としてのクリストフの人生は常に戦いです。大きく分類すれば彼はクラシック音楽の作曲家

ということでしょう。大衆的な歌を作っているわけではない。純音楽を作っているわけです。ところが彼は「クラシック音楽なんて根本から腐っている」といつて憚らない。クラシックは偉い、立派なものなのだというような立場ではない。自分は現在の時の芸術を切り拓いているのだ。そういう烈しさがある。

そこでびつくりするのは、例えばブラームスですね。この小説でのブラームスへの批判は仮借ないものです。駄目な音楽の代表ということで出てくる。『ブラームスはお好き』というサガンの小説がありますが、ブラームスがお好きな人が読んだらむっとするでしょう。

そんな調子で、クリストフは青年期に入っていつそう妥協なく激しさを増していくのです。このあたりからフランス人との触れ合いも生じます。コンサートでまたまフランス人女性と知り合います。これがアントワネットというフランス人女性です。あるいはフランス人の歌手と知り合ったりもします。さらに、大公を批判する記事を新聞に書いたりして、だんだんドイツにいらなくなってきました。ブラームスを罵倒して自分のパトロンである大公まで批判するので、自分で自分の首を絞めているようなものです。忬度はいつさいなしという性格をむき出しにしていく。この辺からクリストフはだんだんフランス寄りになってきて、フランス文学を片っ端から読む、フランス語を勉強する。そこで象徴的な言葉が出てきます。「彼はヘンデルとともに考えていた。『何かを光栄とする者のうちで、おのれの国家を光栄とするものは、至極の愚者である』と」「おのれの国家を光栄とするものは、至極の愚者である」

一 国家などという限定された領域に自分の精神を閉じ込めておくのは人間として恥ずかしいことだ、というような姿勢がはっきりしてくる。国境を突破していく芸術家の生き方が、前面に押し出されてきます。そもそもクリストフは国境など認めない男なのではないか。やがて、いざこざがあつて彼はドイツにいられなくなり、フランスに亡命します。ここから亡命者ジャン・クリストフの物語になっていきます。

第五編「広場の市」からがフランス編になりますが、ドイツを捨ててきたからといってフランス礼賛に走るわけ

はない。それどころか、クリストフがフランスに向けて浴びせる悪口は、これはあんまりだというくらい容赦ない。特にフランスの社交界、そして社交界的なものと結びついた文化の皮相さや、虚栄心の満足ばかり求める人たちに對する批判、非難が止まらなくなってきました。痛快でもあるが、苛烈だなあと印象ですね。ドイツにいられなくなったクリストフは、パリでも窒息感を覚えていたたまれなくなる。この小説の異様さがそんなところにも際立ってくるのです。

例えばこんなセリフがあります。「僕は君らがきらいだ。フランス人は皆きらいなんだ。君らにとっては、芸術はなんでもないだろう。いつでも婦人ばかりが問題だ」いかにも駄々をこねているような調子です。しかし同時に、フランス文化は女性中心、女性をちやほやし、女性との恋愛ばかりをテーマにしている。そうした、よくフランスのと思われているようなものを真っ向から切り捨てるラディカルな精神の衝動も感じ取れるのです。フランス文化批判という点でこの小説はいろいろ考える材料を与えてくれます。

とはいえ、この小説で最大のヒロインは、ここに登場するアントワネットでしょう。軽佻浮薄でない、真剣に、誠実に生きるフランス人の姿です。社交界的、文化的フランスを超えた、ロランにとつての本物のフランスというのは、アントワネットという女性に収斂していくのですね。第六編「アントワネット」はこれだけ取り出しても、一つの小説としてまとまりのよいものだと思います。

アントワネットにはオリヴィエという弟がいて、一家が没落し両親が亡くなったのち、自分の弟をエコール・ノルマル・シュペリウールに入れるというのが彼女の人生の大きな目標で、そのために自己を犠牲にして若くして死んでしまうという設定です。

ここで思うのは、エコール・ノルマル・シュペリウールという学校の重要さです。皆さんご存知のとおり、フランスにおける最高学府ということですが、『ジャン・クリストフ』あたりからフランスの小説でエコール・ノルマルの

生徒という設定が目立つようになってくる気がします。僕は一九世紀が本来の専門ですが、例えばロマン派の文学者はエコール・ノルマルとほとんど無関係です。ヴィクトル・ユゴーにしたってノルマルを出ているわけではないです。それが二〇世紀になって、第三共和政以降、エコール・ノルマルの重要性が確立され、いわばフランス的知性の最も卓越した部分のシンボルになってくる。

このあとで触れるつもりですが、ロジェ・マルタン・デュ・ガールの『チボー家の人々』の主人公ジャックというのが、エコール・ノルマルを受験します。さて合格するのかどうかといったあたりが、とても面白く描かれています。ところが、エリート中のエリートというエコール・ノルマルの生徒を登場させながら、エリート主義には鼻もひっかけないところがロマン・ロランにはある。それがまた彼の高潔なところだと思えます。ロランは、そういう知的なブランドが一切通用しない世界を描くんです。われわれが思い描くフランス文化はブランド中心になりがちですね。ルイ・ヴィトンとかエルメスとか、そういう類のブランドから始まって、文学でも映画でもさまざまにブランドが幅をきかせている。ロマン・ロランにはそういうものに頼る部分がまったく感じられない。でも同時に彼自身、エコール・ノルマルの出身だからこそ、知的にも芸術的にも崇高なもの、至高のものを求める。そういう姿勢が生き方の根本にあるような気がします。

ロランの書法の特異さ

先を急ぎましょう。クリストフのバリでの評判が徐々に高まっていくのですけれども、何しろ猛烈な批判と反抗の人ですので、なかなか順風満帆というわけにはいかず、彼の人生はジグザグを描いてうねりながら進んでいきます。

今回、『ジャン・クリストフ』を通読して一番びっくりしたのは第九編、岩波文庫の訳だと「燃ゆる荊」という難しいタイトルになっています。旧約聖書のモーゼのエピソードから来たタイトルですね。メーデーを背景に、労働者

との連帯というテーマが強く打ち出されるのですが、クリストフは知り合いの青年が群衆に巻き込まれたのを助けようとして警官隊ともみ合いになり、警官を一人、殺してしまふ。これは衝撃でした。クリストフが人を殺していただなんて、知らなかった。しかも警官殺しです。もみ合いの中での不慮の事故で、最初から殺そうとしたのではないのですが、それくらいの激烈な衝突、葛藤というのがこの時代、パリの街頭でありえたということですね。

これは「黄色いベスト」運動が収まらない今のパリでもありうるかもしれないし、香港では毎日のようにそうした事態が報道されています。

そこでクリストフはまたも亡命者にならざるを得なくなりまふ。このあたりは全体の起承転結で考えると転に当たります。まさに転がって行く。あえていえば、クリストフが地獄に落ちていくところかもしれない。スイスに亡命して知り合い宅に匿ってもらうのですが、その奥さんと関係を持つてしまふ。クリストフが一番嫌いだつたはずのフランス恋愛小説の伝統に従うかのように、姦通小説になつてしまふのです。一三世紀の『トリスタンとイゾー』以来の伝統ですね。これもまた、小学生の頃には想像もできなかった展開です。

その相手は恩人の奥さんですから、一緒の家にいるのがつらくてしかたがなくなり、二人で心中しようとする。ピストル自殺を図るところまで行つてしまふ。クリストフの人生で最も暗鬱な時期かもしれません。そこからまた逃げ出し、起承転結の結を迎える。クリストフは老年に達します。最後は音楽家としての業績が広く認められ、穏やかな境地の中で肺炎になつて死ぬ。臨終のときの意識の揺れ動きまで描いてあります。

いかがでしょう、岩波文庫で合計二千ページくらいをうんと圧縮してお話したわけですが、とにかくこれは、おさまりのいい名作などというものではなく、奇妙なところや異様な要素をたつぷりと含んだ凄惨な小説だという印象です。

現在、大河小説やロマン・罗兰の研究者は非常に少ない。日本のフランス文学会にはほとんどいないのではない

でしょうか。なぜかという、みんなブルーストに向かってしまからです。フランス文学研究で近年、最も栄えているのがブルーストでしょう。日本のブルースト学は特筆すべき成果をあげていますが、その分、ブルーストの同時代作家たちへの関心が薄まってしまったのは否めないでしょう。

しかしまさにブルーストと同時代を生きたロマン・ロランも、これはこれでじつに特異な、巨大な世界だと嘆息を誘われます。なぜブルーストばかりがもてはやされるのかというと、ブルーストが小説を作り変えた、その革新性と豊かさということですね。その場合の小説のイメージはバルザック以来のリアリズム小説です。それをブルーストは独特の時間と記憶の思想を深めながらすつかり別のものにしてしまったというわけです。それに対してブルーストと同時代のいわゆる大河小説を書いているような人たちはバルザックのリアリズムから、その後のゾラの自然主義へとという流れをそのまま温存して書いたとされる。だから古臭いし、時代遅れなんだということになっているわけです。

ところが、ロマン・ロランを実直に読んでみればすぐにわかりますが、ゾラとロマン・ロランは全然似ていない。それからバルザックとロマン・ロランもほとんど似ていないのです。まあクリストフの少年時代はまだリアリズムのなタッチで書かれていますけれども、ロマン・ロランの小説には基本的に、バルザック、ゾラ流のリアリズムが希薄だと思えます。

そのことは、『魅せられたる魂』を読むとさらにはつきりします。リアリズムでなければ何かというと、イデアリズム、理想主義ですね。ロマン・ロマンは高邁なものを求め続ける。理想を追求しているのです。だから彼の小説にとって、今日は何時に起きたとか、来週どこそこへ行かなければならないとか、そういう日常的なことはどうでもいいのです。

普通の小説はそういう記述が基盤になっています。何月何日、午後何時にどこそこだと、具体的なディテールが欠かせない。ところがロマン・ロランの小説にはそれがほとんど書かれていない。僕はバルザックよりはやはりユゴー

に近いと思いました。これまた、日本の仏文学会には伝統的にヴィクトル・ユゴーの研究者が少ない。ほとんどいいといていい。みんなボードレルの『悪の華』にやられてしまい、ユゴーはボードレルによって乗り越えられたとか、口当たりのいいヒューマニズム詩人にすぎないとか、最初からないがしろにしてしまう。なかなかユゴーの真の偉大さに到達できずじまいになってしまうのです。

実際のところ、ユゴーは小説家としても偉大な人でした。『レ・ミゼラブル』はいまだに力を失っていないし、『ノートル・ダム・ド・パリ』も愛読されている。しかしそのユゴーを引き継ぐ作家はあまりいなかったのではないか。ロマン・ロランはバルザック、ゾラよりはヴィクトル・ユゴーの系譜ではないかと思えます³。

その系譜においては、人間と社会に対し、絶えず高い理想の実現を求める。そのことで「魂」が高められていく。この魂というのがロマン・ロランの作品の鍵を握るものであり、最近のフランスの小説にはまず出てこない概念でしょう。魂の次元をどれくらい真剣に考えるか、求めるかということ、ロマン・ロランに対する姿勢は変わって来ると思います。

さらにロランの作品の特色として、普通の小説を読みなれた読者をとまどわせるのは、時間が書いていない。それぞれの事件や出来事がいったいいつ起こったのかというのは、はっきりしないケースがじつに多い。ジャン・クリストフが警官ともみ合ったのは彼が何歳のときだったのかも、そのメーデーが何年だったのかも、書いてないのです。そこからして一般のリアリズムとは違うことがわかります。

何年何月と具体的に書かない小説でいい浮かぶのは、やっぱりブルーストでしょう。ブルーストの小説は『失われた時を求めて』といいながら、クロノロジックな意味での時間をきちんと書かないわけです。語り手にして主人公の男が幾つになったのかさっぱりわからない。そういう点で、ロランとブルーストは大いに共通性があります。ひよっとするとブルーストはロランに学んだところがなかったらどうかとも思うのです。時計に縛られない小説なん

です。

リアリズム小説の約束事を無視する点で、ロランは先駆者といっているでしょう。人物の外見の描写などにもこだわりがない。

ロランは深い友情でつながれた女性であるマルヴィータという人に、『ジャン・クリストフ』は音楽小説、あるいは音楽詩なのだと言っている。言葉で音楽を表現するという指向性それ自体のうちに、観念的というか、リアリズムから逸脱していく原因があるのかもしれませんが。これについて見事な批評だと思ったのは、哲学者アランの言葉です。新村猛の『ロマン・ロラン』（岩波新書、一九五八年）に引用されていた言葉で、「この作は、二重の意味で音楽的である」というのです。「音楽を文章で描写するのはほとんど不可能事だ。あらゆる流儀においてロマン・ロランとは正反対である。ブルーストはヴァントウイユの小楽節を言葉だけで作り出してみようと志した」ヴァントウイユはブルーストの作品に登場する作曲家で、彼の残したソナタがスワンとオテットの恋のテーマ曲として巧みに用いられている。ところがアランはいいません。「これは美しい戯れだ。しかし戯れにすぎない」けっこう否定的な言い方ですね。そしてこう続けている。「『ジャン・クリストフ』のなかで、音楽は一度ならず文章で叙述されている。しかし徒勞だ。クリストフの作曲が決して私には聞こえはしない。その代りこの書物全部が音楽なのだ」

これはロランへの理解として、透徹したものです。われわれはたとえば小説の中にブラームスの曲がでてくれば、それどんな曲だろうかと、実際の曲と一対一対応させようと思えますよね。アランは、ロランの小説はそういうものじゃないといたいのでしょう。作品自体が奏でている音楽を自分で聴き取るしかない、そういうふうにロランの作品は書かれているというわけなのです。

それとは別にもう一つ、強調しておきたいのは、『ジャン・クリストフ』が圧倒的に、男一人の物語だということ。次にお話をする『魅せられたる魂』が女性主人公であるのと対照的です。リヒャルト・シュトラウスではあり

ませんが、『英雄の生涯』なんです。

この点でもブルーストと比べてみると興味深いでしょう。ブルーストの小説では、主人公の青年は文学に憧れて、作家になりたい、何か立派なものを書きたいと願いつづけている。でも実際には、社交界にずるずるべつたりで何もしないまま何千ページも過ぎてしまう。最後の最後になってよし、とうとう機は熟したぞとなつて終わるわけです。

これはとてもうまいやり方です。つまり、主人公はどんな作品を実際書いたのかということとは知らされないわけです。『失われた時を求めて』という回想記自体がそれにあたるかという**と必ずしもそうではないでしょう**。これから書かれるべき至上の、最高の作品を宙に浮かせて終わつた。巧妙に逃げているといえなくもない。

ロマン・ロランはそういう点では真正面から書いていますよね。英雄の生涯に銜いなく立ち向かつている。同時代の同じ芸術家小説でありながら、正反対のベクトルを示している。ブルーストを読むときはやっぱりロマン・ロランもおさえて読んだ方がいいのではないかと思ひます。『失われた時を求めて』は一九一三年から順次、刊行されていくわけですけど、その前年、一九一二年が『ジャン・クリストフ』が完結の年です。『ジャン・クリストフ』のあとを襲うようにして『失われた時を求めて』の世界が立ち上がっていくのです。

さらにまた、先ほども少し触れましたが、宗教の問題はどうなっているか。クリストフが、自分にとつてはキリストよりもベートーヴェンの方が神様だ、という箇所があります。本来、西洋の音楽は神への捧げものとして発展してきた側面があるはずですよ。それが、作曲家が神になる。そういう時代の申し子がジャン・クリストフなのですね。でも同時に、クリストフとは、幼いキリストを背負つて川を渡した人物の名前です。そこには、宗教なき時代、宗教が衰えた時代においてなお神聖なもの、宗教的なものを運び、人々に受け渡していく役割を担うのが芸術家なのだという信念が秘められている。これもまた、ブルーストにおける芸術の一種の宗教性と比べたくなる部分ですよ。

そして、やはり先ほど触れた、ジャン・クリストフ・クラフトという名がそのまま**独仏合体を示している**というこ

とがあります。フランスとドイツ、どちらが欠けてもヨーロッパが片方だけの翼になってしまおうという考え方なのですね。

これを第一次世界大戦直前に書いたということには感嘆しないわけにはいきません。『ジャン・クリストフ』が完結したところから、開戦やむなしという世論が怒濤の勢いで広がっていく。フランスの知識人のあいだにも、それまでの論調を変えて、ドイツが悪いからドイツに対して戦争をしなければいけないという人たちがばかりになっていく。ドイツでも同じです。その中でロマン・ロランは戦争反対の姿勢を崩さない。この点は本当に尊敬に値します。周囲に流されず、信念を貫く。大河小説というのは、流れに流されない人が書いたのです。

デュシャトレの伝記に引用されていますが、ロランは「祖国という理想と、人類という理想とに、同時に奉仕するわけにはいかない」と記している。明日にも戦争になるかもしれない時にこれが本当にいえるかということです。祖国のために命を捨てるのが人間の価値であると、だれもが信じこもうとする中で、断固、抵抗を示しています。

ゲーテの「世界市民」というような考え方への共感もあつたでしょう。「私にはもはや、世界のほかに祖国はない」第一次世界大戦直前の時代にそういえた人がロマン・ロランなのです。そのことが小説にも、力強く反映されている。

先駆的ヒロイン像の樹立

もう一つの巨編『魅せられたる魂』に移りましょう。岩波文庫に、宮本正清先生の訳で入っています。一〇年がかりで書かれた、これもとても長い小説ですが、『魅せられたる魂』の方がより現代的かもしれません。ヒロインはいったいどういう女性なのでしょう。『ジャン・クリストフ』の英雄的な芸術家像というのは輪郭がはっきりしています。『魅せられたる魂』の主人公アンネットは何者なのか。二千ページほどの長さを彼女が支えている、その理由は何なのかは、必ずしも自明ではない。意外性があります。

ごく手短にいうと、彼女が未婚の母になったということです。それから徐々に反戦思想に目覚めていく。そしてドイツとフランスの戦争の時期にドイツ人を助けようとする。女がそうやって一人で生きていき、社会に目覚めていく、そのこと自体が尊いという話なのです。

これはまさに今のフランスの女性のあり方を先取りしている。一方、日本では女性の社会参加がまだに遅れていますよね。内閣の顔ぶれを見ても女性の大臣がほとんどいない。アンネットが大臣になるわけではないですが、絶対に自分の人生を他人に奪われないという、そういう生き方を貫いた。そういう意味で彼女は英雄的なのです。

全七巻の骨子だけ掴んでおきましょう。主人公はアンネット・リヴィエール、リヴィエールは川という意味です。大河小説の河に繋がります。大河小説がいつからこういう呼ばれ方をしたのか、どうして大河小説といわれるようになったのか、いろいろ調べてみました⁵が、結局、答えは出ていないようですね。最近フランス人研究者の出した力作の大河小説論がありますが、それを読んでも、ロマンフルーフという言い方がいつから本当にあったのか、誰が最初に使ったか、実証的に明らかにはできないようです。

さて、アンネットは父親の死後、隠し子がいることが判明した。会いに行ってみて、シルヴィというその娘とすっかり仲よくなる。異母妹ですね。アンネットには将来有望な恋人がいる。やがて政治家として出世していく人物です。ところが結婚の一手手前まで行って、一夜を共にし、妊娠までしたのになぜか彼女は、やっぱりあの男と一緒にいるのはいやだと、彼を捨ててしまふ。それで未婚の母になってしまふ。

英語でベターハーフなんていいますね。自分の分身でしかも自分よりできがいいと、妻にいくらからおもねった言い方なんでしょう。でもそんな言い方はアンネットには通じません。私は半分になんかなりたくない、まるごと一人でいたいと。じつに鼻っ柱の強い、夫の支配下に入ろうなんていう気は毛頭ない女性なんです。それで未婚の母の道を選びます。

しかし時代はまだ一九一〇年代、一〇〇年以上も前です。未婚の母でなぜ悪いというぐらいにフランスがなったのも、結局二〇世紀末のことではないでしょうか。カトリーヌ・ドヌーヴという女優がいます。彼女が若いころ、名うてのブレイボーイ監督ロジェ・ヴァデームとのあいだに子どもができました。一九六〇年代初頭でしょうか。するとドヌーヴばかりがマスコミに叩かれた。結婚もしないで子どもを産むなんてと。そこに現れたのがジャック・ドゥミで、ドヌーヴ主演で『シエルブルの雨傘』を撮った。ご存じのように『シエルブルの雨傘』は未婚の母になってしまった娘をめぐるメロドラマで、ドヌーヴはこの映画の大成功で女優として息を吹き返したわけです。

だから少なくとも一九六〇年代までは未婚の母になるのは大変だったということがわかります。ところが現在のフランスでは、生まれてくる子どもの半分以上は婚姻外出産によるものです。状況は完全に変わったのですね。そういう意味でアンネットは、フランスの現在を予告していた。全四編からなる『魅せられたる魂』の第四編は「予告する者」と題されていますが、ロランが自らのテーマの先駆性を自覚していたことがわかります。

それからもう一つは『ジャン・クリストフ』と共通する点ですが、戦争に抗う。時代に流されないということです。フランツとジェルマンという親友同士が出てきます。フランス人がジェルマン、つまりジャーマンという名前で、ここにもロマン・ロランの独仏を融合させたいというメッセージが見て取れます。アンネットは二人を親身になって助けるのです。

女性が主人公の長編小説といえば、『ボヴァリー夫人』なんかがすぐに思い浮かぶとおり、きっと恋愛小説だろうということになる。しかしロマン・ロランの小説はそうではない。アンネットは何回も恋愛をしますが、それは絶えず乗り越えていくべきステップではない。いわゆる人生の肥やしにすることです。私は一人で立派に自立しますというスタンスが変わらない。これはあまり前例のないことではなかったかというのが一つ。

もう一つ強調したいのは、これも『ジャン・クリストフ』の場合と重なりますが、書き方がじつにユニークという

か、不思議な、風変わりなところがある。細かいことが書かれておらず、具体的な情報が乏しい。女手一つで、どうやって育てていくのか。例えば、日本だったら小学校はどうするのか、中学校は受験させるのか、そういう話になってくるはずだ。毎日のお弁当はどうするのかとか。この小説はそんなことには触れようとしません。子どもが何歳になったとか、年齢や時間についてもやつぱりほとんど書かれていない。

何が書かれているかというと、魂の物語が書かれている。一人の女性が、自らの魂を果敢に守り抜き、同時に社会的な意識にも目覚めていく、それがすべてで、卑俗な現実を書いてないし、会話も異様なまでに抽象度が高い。はらはらせる場面としては、アンネットの息子マルクは父親の名前も知らずに育つ。でもやがて、僕のお父さんは誰なのということになる。有名な政治家らしいとわかってくる。アンネットは父親の名前を息子に打ち明け、息子を父親に会いに行かせる。ひよっとすると息子はもう帰ってこないかもしれない、羽振りのいい父親のところでの暮らしを選ぶかもしれないと覚悟します。するとマルクが帰ってくる。少し父親と話をしただけで、父親がいかに俗物であるか、それに比べてお母さんがどれほど素晴らしい人なのかを悟ったのです。

その帰ってきたときのやりとりで瞠目しました。魂の次元の会話です。マルクは母親に「わが偉大な不服従者！」などと呼びかける。父親は野党の政治家なのですが、実は体制に流されている。お母さんこそが不服従者だ、誰にも負けない、誰にも流されない人だ。「わが偉大な不服従者！もしあなたがそうでなかったら、ぼくはこんなにあなたを愛さなかったでしょう！」びっくりするようなせりふです。この母にしてこの子あり。俗な日常を超越した、精神性に殉じる態度が伝わってきます。

さらに、これも息子のせりふですが「あなたはぼくのお父さんとお母さんです」というのがある。この作品の精神そのものを示している気がします。ここまでくるともう、男なんていらないう世界になってくる。父親はいらない、お母さんさえいれば。男性原理、女性原理と対立させるのは単純すぎるでしょうが、男に対する希望や期待を捨

てている。ルイ・アラゴンの詩にあるように、男は人間の未来は女であるということでしょうか。そんなメッセージさえ感じられるのです。

なぜそこまで女性に期待するのか。女性はいま以上に抑圧され、自由を奪われてきた。可能性を閉ざされてきたからこそ、現状を跳ね返すだけの力を秘めているのだという考えが読み取れます。逆に、男は体制化し、生命力を枯渇させ、動かなくなってしまうている。そういう認識なんです。それはまた当時のフランス文化、社会への批判に結びついています。そこでまた、ブルーストです。今ではブルーストの悪口をいう人などまずいません。だからロランの批判を読むとびつくりします。ヨーロッパの病を指摘するくだりで「フランス セミチックのびろうどのような眼をした男女両性者の神経衰弱気取り」(「予告する者(上)」)などと書いている。ジョイスを始め、他の大作家たちもなで斬りにしているわけなのですが。

それだけ、戦争の袋小路に陥ってなすすべのないヨーロッパ・インテリ文化人の脆弱さに耐えがたい思いがあったのでしょうか。芸術至上主義的な態度ではもはやにっちもさっちもいかなくなるという、非常な危機意識を抱いていたことが窺えます。

雄渾さと大胆さ

というわけで、この二大長編を読んで浮かび上がる、ロマン・ロランの小説の書き方というのはきわめて独自で、かなり常識はずれのものだという印象を僕は持ちました。またそこには雄渾なメッセージ性、広大な社会的ヴィジョンが感じられます。

同時代のいろいろな芸術家や思想家とロマン・ロランは様々なつきあいがあり、やりとりがあったようです。フロイトと手紙を交わし、実際に会ったりもしている。フロイトが精神分析的に宗教を説明するのに対して、ロランは、

それは宗教を知らない人間の考えだとあっさり否定する。あなたの知らない大洋的な、大海原のような感情があるのだと。自分にはそれがわかる、それが宗教の大元なのだという。つまり大河小説の先には大洋がある。さらにはそれが宇宙にまで通じていく。

やはりデュシャトレの伝記にあつたのですけど、自分は「偉大な宇宙的法則にじかに触れて、それらの法則へと溶け込んでゆく」のだとロランは書いている。それはもう、ロランが実際に生き、経験した次元なのだというほかないでしょう。そこに彼の精神の雄渾さが根差している。生と死が矛盾なく溶け合っているようにさえ思えるほどです。

『ジャン・クリストフ』も『魅せられたる魂』も最後に主人公が死んでいく、意識が遠のいていくところで大団円を迎えますが、死が忌まわしいものとして書かれていません。怖いものでさえない。死んでいくのは喜びであり、恍惚なのです。帰るべきところに帰っていくような落ち着き、ゆとりがある。小説の最後でそんな境地を垣間見させてくれるのですね。

それから、『魅せられたる魂』にも書き方のテクニクから見ても、やはりブルーストに負けないような、大胆な仕掛けがあります。というのは第四編に至って突然「私」が前面に出てくる。それまではずっと三人称で、客観的に書かれていた。ところが「予告する者(中)」でふと、「私が初めてマルクに会ったのは……」云々と出てきて、読者としては「私」っていったい誰なんだとびっくりします。

つまり作者自身が介入してきているわけです。一種の掟破りですよ。どうして最初から「私」を出さなかったのかと訝しくもなりますが、とにかく非常に驚きのある「私」の登場なのです。その瞬間に、マルクもアンネットも、みんなロランさんのお知り合いだったんですか、本当にいた人なんです。ということになる。もちろん現存したわけではないと知りながらも、これはひょっとするとフィクションではなかったのかと思いたくなるような瞬間を作り出している。あまり例を見ない、面白いやり方ですね。単なる小説では満足できないロランの、現実と虚構を結びつけ

てしまいたいという意思が感じ取れます。

マルタン・デュ・ガールによる継承

かなり時間が経ってしまいました。今日、無知を顧みずにロランや大河小説についてお話することにしたのは、二つ理由があったのです。一つは、『ジャン・クリストフ』に読書のすばらしさを教えてもらったこと、もう一つの理由、ことですね。口幅つたい言い方ですが、少しでもご恩返しができたらという気持ちがありました。もう一つの理由、それは最近、大河小説というジャンル自体を再評価する意味があると思わされる出来事があったのです。お恥ずかしいことに、マルタン・デュ・ガールの『チボー家の人々』をこの歳になって初めて読んだのです。

これから『チボー家の人々』のあらすじをこまごまと申し上げるつもりはありませんので、ご安心ください。ほんの少しお話して、終わりにいたします。

『チボー家の人々』が刊行されたのは一九二二年から四〇年にかけて、両大戦間の時代でした。世界戦争という未曾有の事態を正面から受け止めた作品です。細かく見ると、二二年刊の第一編『灰色のノート』から二九年刊の第六編『父の死』まで着々と刊行されながら、第七編『一九一四年夏』が一九三六年に出るまで間が空いている。これはマルタン・デュ・ガールが三〇年代のファシズム台頭という状況を前に考え込んでしまったことを意味しています。予定していたプランを捨てて、ファシズムや戦争の論理をどう食い止めるべきかを真剣に考えた。その結果が『一九一四年夏』となったのでしょうか。第一次大戦はどのように起こったのかを克明に辿り直す小説を、第二次大戦直前の時期に書いたのです。

チボー家の特色というのは、大変怖い父親が君臨しているんですが、母親の姿はない。女性原理ではなく男性原理のみが支配する、男たちの世界です。そこからの逃亡を、次男のジャックという一途で純潔な少年が企てる。ジャック

クはエコー・ノルマルの生徒になりますが、社会的な使命感を抱いている。それを、より大人であるけれど、父親の価値観をそのまま受け継ぐわけでもない長男のアントワーヌが見守る。そんな構図になっています。

ロランの作品に比べてこの小説が読みやすく思えるのは、より一般的なリアリズム小説のスタイルで書かれているからでしょう。非常に純度の高い文章ですけれども。とはいえやはり、肝心なシーンを描かざしおくとか、禁欲的なまでに黙説法を貫くといった面もあり、それがまた作品に深い陰影を与える結果になっています。全七編ですが、各編のあいだに断絶ないし跳躍があつて、読者はそれを自力で埋める必要がある。

マルタン・デュ・ガールは若いころロランに傾倒したようです。ロランの力強い平和主義や反戦思想を受け継いでいることが感じられます。『一九一四年夏』の中で、ジャックは社会運動から反戦運動に深入りしていきます。社会主義は本来、国境を超える労働者同士の連帯、団結を促すはずだった。ところが戦争やむなしとなると、理想はかなくなり捨てられ、好戦的な愛国主義の嵐が吹きさすさぶことになります。ジャックは嵐のただなかに頭から突っ込んでいく。ドイツの兵士もフランスの兵士も血を流さなくてすむようと、飛行機で和平を呼びかけるピラをまくのです。前線の上空ですから、これはもう自殺的行為なのです。

このジャックのわが身を捨てて平和を訴える行為に似た事柄が、『魅せられたる魂』の最後のように出てくることに気がつきました。岩波文庫版の第七巻、『予告する者(下)』でシルヴィオという青年が、ファシスト党の支配するローマ上空を飛翔して、独裁者批判のピラを撒くのです。『チボー家』のジャックはこの青年のいささか向こう見ずでもあり感動的でもあるふるまいをそっくり反復していることになります。若者の特権としての純粋な反抗が引き継がれている。ほかにも、ロランから『チボー家』へ何が継承されたのかについては、まだたくさん考えるべき点がありそうです。

マルタン・デュ・ガールのほうは駆け足になってしまいましたが、こうして大河小説の流れの一端に触れてみると、

その系譜が後統世代にまで及んでいることを感じます。とりわけ、この人もやはりノーベル文学賞受賞者ですが、アルベール・カミュの名前を最後に上げておきたいのです。カミュの文学は、この世界が「不条理」だという感覚から出発して、それに対する絶望的なまでの反抗を説くわけですが、そうした枠組みが形作られるにあたり、マルタン・デュ・ガールが少なからず影響を及ぼしています。カミュにはマルタン・デュ・ガールに捧げた美しい文章がありますが、その中で『チボー家の人々』こそ「われわれの時代の作品」であると述べ、「チボー家の人々」とともに、世紀半ばの人間が誕生することになる、「のちにくる人々を援助し得る」作品であると称えています。なるほど、チボー家の長男である、医師のアントワーヌが子どもを救う挿話がありますが、神なき時代においては医師がヒーローになる。カミュの『ペスト』（一九四七年）はそうした設定を見事に継承しています。さらには、『チボー家』を読んでいると不条理 *absurde* という単語が頻出することに気づかされるのですが、実存主義の根幹にかかわるこの概念を、カミュはこの大河小説経由で受け取ったのではないかとも思えるくらいで、興味が尽きません。

長々とお話してきましたが、この辺で終わりにしましょう。ロランの長編を読むことは、僕にとって非常に意義の大きい体験となりました。マルタン・デュ・ガールの作品も含めて、人生の大河を描くことは、世の流れに流されない精神の発露であり、抵抗する人間への賛歌であったのです。そこには今のわれわれにとっても切実な呼びかけがあります。

フランス文学の歴史を考えるうえでも、忘れるわけにはいかない。大河小説を読むと、ユゴーからカミュに至るまでの滔々たる流れを豊かに感じ取ることができるのです。素晴らしいと思うのは、国境を超えようとする精神の力強さですね。ロマン・ロランは完全にヨーロッパ共同体を予言していた。その精神は高邁です。つねに真剣であり、あまりユーモアや笑いはありませんからずつつきあっているとやや疲れますが、高邁さは疑い得ない。そして彼は芸術的にも思想的にも、決してエリート主義者ではない。精神のあり方として誰にでも開かれている。日本でこれだけ

ロマン・ロランが愛され、立派な全集が出て、「ロマン・ロランの友の会」の活動が七〇年も続いているというのは驚くべきことです。彼の文学や思想が、文化も背景も異なる読者に向けても真摯に問いかけてくる力をもっているからそのことでしょう。今後、ぜひ若い人たちに再発見してもらいたいし、僕もこれを機会に、大河小説の可能性をさらに考えていきたいと思っています。

最後になりましたが、本日お招きくださった宮本エイ子さん、そしてお世話になった友の会の方々から御礼申し上げます。

ご清聴ありがとうございました。

(放送大学教授・東京大学名誉教授・仏文学)

- 1 『少年少女世界の名作文学』第二五巻「フランス編七」、小学館、一九六七年。
- 2 『ジャン・クリストフ物語』宮本正清、補訂・宮本エイ子、ロマン・ロラン研究所発行、二〇一九年。
- 3 ロランとユゴーのつながりに関しては、ディディエ・シッシユによる優れた論考があることを講演後に知った。「ロマン・ロランとヴィクトル・ユゴー」シッシユ由紀子訳、「ユニテ」第四五号、ロマン・ロラン研究所発行、二〇一八年、一―一三ページをご参照いただきたい。
- 4 吉川一義は『失われた時を求めて』の「私」が企図する理想の作品は「未来のかなたに（……）蜃気楼のように浮かぶ」ものだとしている。ブルースト『失われた時を求めて』一四「見出された時Ⅱ」吉川一義訳、岩波文庫、二〇一九年、「訳者あとがき（一四）」。
- 5 Aude Leblond, *Sur un monde en ruines: esthétique du roman-fléuve*, Champion, 2015.
- 6 Aragon, *Le Fou d'Elsa*, Gallimard, 《Poésie》, 2010, p. 196.
- 7 カミュ「ロジェ・マルタン・デュ・ガール」菅野昭正訳、『カミュ全集』第八卷、新潮社、一九七三年。

二〇一九年一〇月八日ピアノコンサートトークセッション

ロマン・ロランを巡って

イリーナ・メジエーエワ／西 成 勝 好

西成…本日は「日本ロマン・ロランの友の会」七〇周年記念コンサートで演奏してくださいありがとうございます。
私はロマン・ロラン研究所の理事長を務めております西成と申します。ここで、少しイリーナさんにお話を伺いたいと思います。ロシアではピョートル大帝の時に西欧文化が盛んに移入され、独自の文化をさらに発展させられました。ロランは自分がまだ無名だった時に書いた手紙にトルストイから丁寧な激励の返事をもらったことが彼の他者に対する接し方に影響を与え、膨大な書簡集があります。ご存知のようにロランの二度目の奥さんはロシア人でした。イリーナさんはロシア（ソ連）でお生まれになって、ロシア文化を背景に世界中の多くの音楽家の作品を演奏されておられます。ロランの友の会のような組織はフランス本国のほかにも多くの国にあり、時々フランスで国際会議を開いたりしております。

領土問題など簡単には解決しそうでない問題もありますが、日本ではロシアの文学・音楽などには多くのファンがおります。イリーナさんは日本の録音ディレクターの明比さんと結婚されたのを機に来日され、日本語もとてもお手で、ピアノ曲に関する対談をまとめて出版されるほどです。日本とロシアの今後の友好関係が発展することが望まれますが、日本に暮らされてどのように感じられますか？

イリーナ…とても暮らしやすい国、というのが第一印象でした。人々は親切ですし、食べ物も美味しい。それまで暮

らしたロシアとはまったく違う文化での生活でしたが、カルチャー・ショックのようなものではありませんでした。きわめて自然に日本の生活に馴染みました。もともと私は自分で話すよりも人の話を聞くほうが好きなのですが、その点でも日本の落ち着いた感じ、静けさを大切にする文化は、自分に合っていると思います。

来日して最初の一四年間は東京で、その後約八年間は京都で生活しています。京都で暮らし始めて、ちょっと懐かしいと思ったのは、人々が普段の生活の中で本当にコミュニケーションを大事にしていること。よく考えたら、ロシアでもそれは同じです。知らない人同士でも普通に会話する。その点、東京はちょっと例外的かもしれません。

西成・ロマン・ロランは『ベートーヴェンの生涯』において聴力障害を乗り越えて苦闘したことを念頭に置いて、「悩み戦っている人々の最大最善の友である」として人間ベートーヴェンの紹介をしています。ロランの言うとおり、ベートーヴェンは「悩みそのもののような人間、世の中から歓喜を拒まれたその人間が自ら歓喜を造り出す」、これすなわち、「悩みを突き抜けて歓喜に到れ」ということです。ロランはこのほかに『ベートーヴェン——偉大な創造の時期』という音楽学の観点からの詳細な分析と総合をしたり、ウイーンのベートーヴェン一〇〇年祭で「ベートーヴェンへの感謝」と題する講演をしましたが、これはロランを敬愛する人の間でよく知られています。楽器を演奏することをフランス語では「jouer（英語の play）」も使いますが「interpreter」を使うことが多いですね、この解釈するとう点において、イリーナさんはロランの見解をどのようにご参考になされておられますか？

イリーナ…直接的な参考、というのはいまありませんが、ロマン・ロランの豊かな想像力を助けとして私自身の想像力の入り口とすることが多いです。

たとえば、交響曲第九番についてのロランの見解。冒頭部についてシェイクスピアの『マクベス』との魔女たちの場面との関連について語っています。また、『マクベス』を愛読していたベートーヴェンが『マクベス』のための序曲を書くこととしたこと、それは実現しなかったけれど、ピアノ・トリオ作品七〇—のラルゴ楽章にそのスケッチを使ったこと、

などが述べられていて、想像力がどんどん広がっていきます。こちらとしても読みたくなるし、調べたくなるのです。

楽譜に書かれてある音符を実際の音にするときに、「想像力」はとても重要です。どんな音を出したいのか、どんな雰囲気を作りたいのか。そういった点でロランの言葉から大いに刺激を受けることが多いのです。

西成…今日演奏してくださいの曲目について、選ばれた理由をお聞かせ下さい。

イリーナ…プログラムに私のコメントが載っているので、ここではそれ以外のことをお話しします。全体として文学的要素の強い曲目が多いと思います。

一曲目の《悲愴》「ハ短調」はベートーヴェンにとって「運命」ともいえるべき調性です（《運命》交響曲と同じ）。暗くて激しい、エモーショナルな世界です。

《テンペスト》の「ニ短調」は「死」や「運命」と関連の強い調性で、レクイエムなどによく使われます。このソナタは幻想的で謎めいた音楽ですが、終楽章は無窮動（perpetuum mobile）で、逃れられない運命のようなものが表現されています。一八〇一—一八〇二年頃の作曲ですが、一八〇二年というのは、ハイリゲンシュタットの遺書が書かれた年です。ベートーヴェンがいちばん苦しんだ時期です。

後半の一曲目は、少し世界を変えて、ベートーヴェンのピアノ・ソナタの原点のような作品を取り上げます。ソナタ第九番は「弦楽四重奏」的なマインドが明確で、ベートーヴェンのソナタ書法のエッセンスをもっともよく表した音楽です。そして最後は、やはり文学的要素の強い《告别》。終楽章では再会の喜びを高らかに歌いますが、まさに苦しみを乗り越えて歓喜へ至るといふ図式です。

ハ短調《悲愴》で始まり、平行調の変ホ長調《告别》で終えることで、プログラム全体としての統一感を目指しました。

西成…ありがとうございます。演奏いただく曲に一層親しみを感じます。では、また演奏をお願いします。

『ジャン・クリストフ物語』 発刊にあたって

『ジャン・クリストフ物語』（宮本正清 述）を朗読しはじめて一五年余、九〇年以上も昔の作品なのでいつか接ぎ木をしてのちへ繋ぎたく小さな願いを持ち続けてきました。「日本ロマン・ロランの友の会」ができて七〇年、二〇二〇年はロマン・ロランが最も敬愛したペートーヴェン生誕二五〇年を迎える時期に、ロラン活動に深い共感と強い危機感をもっている一老婦人の貴重な寄付と、著名なフランス文学者の『ジャン・クリストフ』抄訳に子ども時代に夢中になったという報道が神風のように強い追い風となって実現できました。「時過ぎ、時来たった」の感深く、時宜を得た思いです。

こうして新版『ジャン・クリストフ物語』がロマン・ロラン研究所の私家版として「みすず書房」の制作によって上梓することができました。手に取れば読書をそそる挿絵の魅力も「欲しいね」ということになりました。アルバン・ミシエル版の版画フランス・マスレールを転載すれば著作権の問題が発生します。この時、フランスのロマン・ロラン協会リエジヨワ会長がご尽力くださいました。フランス・マスレール財団から私家版を条件に無償の回答を得ました。関係者が見返りを求めずして結実したこの小書を大事に育てたいと思います。『ジャン・クリストフ物語』はペートーヴェンの子ども時代を描いていますが、内容は子ども時代とはいえ人生、社会の縮図であります。『ジャン・クリストフ』の扉記「どの国の人々であれ 悩み そして闘かっており うち克つであろう自由な魂たちに 捧ぐ」と記されています。ヒューマニズムが無視されナショナリストが台頭する混沌とした不安な現代、「人生いかに生きるか」という普遍的な問題はいかなる時代にも悩む生身の私たちに生きるヒントとなることでしょう。ロラン精神の真骨頂、理想と平和の一粒の種を絶やさないう、これからもささやかながら取り組んでまいります。

フランス・マスレール木版画入り『ジャン・クリストフ』の原書を求めて

植松 晃 一

二〇一九年七月、宮本エイ子様より、刊行予定の『ジャン・クリストフ物語』にフランス・マスレールの挿画を使用したいので、一九二五―一九二七年にアルバン・ミシエル社が出したマスレールの木版画入り『ジャン・クリストフ』五巻セットを手に入れられないかとご相談がありました。

早速、インターネットで国内外の市場を検索したところ、すぐに複数の出品が見つかりました。それらの中から、本の装幀や木版画の状態が良く、何らかの付加価値があることを条件に絞り込み、ドイツのネット通販サイトに出品していたスイスの古書店から取り寄せることにしました。

古書店の説明によれば、今回購入した本はドイツの法律家ヘルベルト・ルシエヴァイ (Herbert Ruscheweyh) が

所蔵していたものです。本の扉に貼られたルシエヴァイの蔵書票には「一九三九年四月」と書き込みがあり、第二次世界大戦の勃発前夜に手に入れたものと推定されます。

ルシエヴァイは一八九二年生まれ。第一次世界大戦中は軽騎兵連隊などに所属し、ハンザ十字勲章を受章。一九一七年にドイツ社会民主党に入党し、一九三一年から一九三三年までハンブルク市議会の議長を務めました。

ナチスが権力を掌握すると、共産党員や社会民主党員の弁護活動に奔走。特に、ユリウス・レーバー（後にヒトラー暗殺を企てる政治家）に対する弁護でその名を知られたそうです。ゲシュタポは政治犯の弁護を禁じましたが、ルシエヴァイは弁護士としての活動を続けました。一九四四年、ヒトラー暗殺未遂事件が起こると逮捕・投獄されるものの生還し、戦後は裁判官に転じて活躍。ハンブルク大学名誉教授など要職を歴任し、ドイツ連邦共和国功労勲章の大功労十字星大綬章を贈られました。

本にはマスレールの自筆署名も入っていました。署名

の日付は「一九六六年一月一日」で、ロランの生誕一〇〇周年に当たるタイミングで書き込んだようです。

人と人との出会いに縁があるように、人と物との出会いにも縁があるものです。ロランと深い絆で結ばれたロマン・ロラン研究所だからこそ、それにふさわしい本との出会いが実現したのだと思います。その仲立ちができて、とても光栄でした。ありがとうございます。

ジャン・クリストフ物語 読後感

ご恵送いただいた『ジャン・クリストフ物語』を拝読いたしました。『ジャン・クリストフ』は、これまで片山敏彦訳や豊島与志雄訳で何度も読んできましたが、それらとはまた異なる、新鮮な感動がありました。敬愛するゴットフリート叔父さんとクリストフとの交流もすっかり描かれていて、とても嬉しく読みました。

特に印象深かったのは、本書を締めくくる父親メルキオールの死の場面です。一五歳の少年が背負うには、あ

まりに重い「生」の実相。この「神」が語ることに頷けるようになるまで、私は三〇年以上かかりました。思春期の嵐を過ごしている少年にとっては、過酷で危うい運命かもしれません。

若き日の論文「真であるがゆえに私は信じる」の中で、ロランは「死」について次のように書いています。

「死」、ぼくがこれまで生き、書いてきたのは、それのためだ。「死」こそぼくの行動の原則であり、多くの思想の源であった。ぼくの言葉の厚いヴェールの下には、いたるところに「死」がいる。ぼくの各ページに、「死」が書きこまれている。ちょうど多くのこのころのように、「死」は物事の魂である。なぜなら「死」とは、万能で完全な「生」であるからである。「死」はぼくの真の存在（実体）を、ぼくに取りもどさせる。「死」は、ぼくが容易に打ち勝てない幻覚を断ち切り、「普遍的な生」の幸福な意識のなかに、ぼくを浸らせる。

（蜷原徳夫訳『ロマン・ロラン全集一九』みすず書房）

さらに、後進の作家ジャン・ボダン宛の手紙（一九二四年二月九日付）にはこうあります。

一九〇一年から、わたしは遺言を書いている。この遺言は『ベートーヴェンの生涯』、『ミケランジェロ』、『ジャン・クリストフ』その他すべてのものとなりました。死と面と向かって生き、そして書きなさい！ 死がいることが偉大な作品や偉大な思想を靈感します。しかし死を前にしてもくじけてはならない！ 恐怖なく、自分の精神の炉辺に死のために席をあけている人びとにとっては、死は友となります（中略）あなたが生きるのを助けてくれるほど死が親しいものとなるように努めなさい、と言うのです。死はわたしにとってよい仲間です。

（山口三夫訳『ロマン・ロラン全集三八』みすず書房）

この世に生きるすべてのものが、例外なく死を経験します。死は避けがたい強烈な事実です。自分自身の死と向き合い、死の顔を見つめ、死とともに暮らすことで、人は

自身の本質を見極め、己を離れて真実など存在しないことを知るでしょう。死を理解しようとすることは生を理解すること。今回『ジャン・クリストフ物語』を拝読して、自分の詩集『生々の綾』に収めた「人間は死とともにあるときのみ真実だ」という思いを、あらためて強くしました。

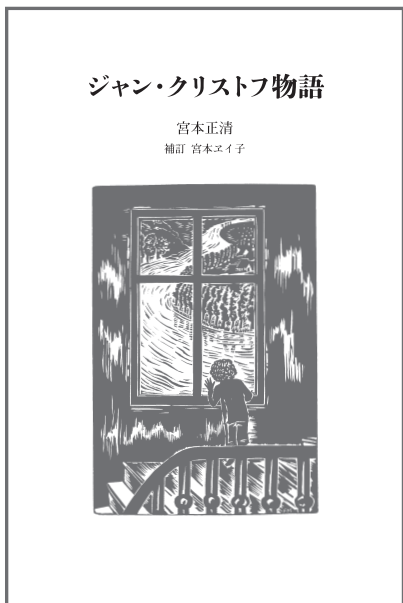
死の側より照明せばことにかがやきてひたくれなるの生ならずやも

（女流歌人・齋藤史著『ひたくれなる』不識書院）

『ジャン・クリストフ物語』の出版は、社会的に意義の大きいお仕事だったと思います。本書の刊行にご尽力されたすべての方々に、一人のロラン愛読者として深く御礼・感謝申し上げます。

一九七一年、フランス・マスレールはロランについて次のように語っていました。

「彼は、最後の唯一の抛りどころとして、人道に踏みとどまろうとしたのですが、そのユマニテこそ、

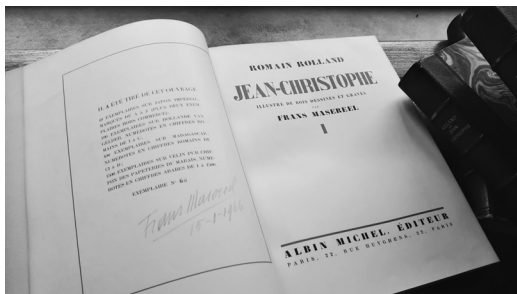


失墜した価値観の最たるものであるだけに、彼の生き方は十全に理解されていないと言わなければならない」（山口俊章訳「ロマン・ロラン研究」第二二〇号）

ロマン・ロラン協会

新たな装いで出版されたことで、『ジャン・クリストフ物語』が今を生きる人々に再び親しまれますように。そして、ロランの精神がこれからを生きる子どもたちに受け継がれ、生き続けますように。

（詩人・ライター／賛助会員）



『ジャン・クリストフ物語』を紹介して

久保 ひさ子

この一月の半ば、私の住む地域で一五、六人の新春の集いがありました。この会で『ジャン・クリストフ物語』を少しでも若い方たちに紹介したいと思い参加しました。しかし、六〇代以下の人は僅かで七〇歳以上が殆どでした。懇談の折、私はこの度の『ジャン・クリストフ物語』の発行にかかわる事柄について話しました。会が終わってから、八〇歳前後の女性、AさんとIさんから話しかけられました。この方たちとは長年の顔見知りですが、この日初めて、それぞれが、ロマン・ロランの作品に青年の一時期心を奪われていたのを知りました。その意味で知人との新たな出会いの日になりました。

地域でのボランティア活動を長年やってこられたAさんから、「久保さん、びつくりしましたよ。こんな席で宮本正清先生の名前を聞くなんて！ほんとに驚きです。宮本先生と私の父（岡田正三、専門はギリシャ哲学）は戦

前戦後を通じて大変親しい間柄でした。特に、私が子どもころ、昭和一〇年代ですが、『女性教養の会』を立ち上げ京都と大阪で一緒に活動していました。この会は、宮本正清、滝川幸辰、住谷悦治、能勢克男といった学者が中心になり、女性を対象に幅広い内容の講座や見学会を開いていました。詩人、画家、映画監督、劇作家、随筆家など、当時の京都の一流の文化人が講師として協力されていました。講義は京大の楽友会館であり、見学会などの写真では五〇人ぐらいの人が写っています。父母が事務局的なことをしていましたので、私はいつも連れていかれました。この活動は多分終戦の前年まで続いていたと思います。この会から得たものもろの経験から、後に私は女性が自立するということはどういうことか真剣に考えるようになりました」。

Iさんについては、二年前に地域で「戦争を語る会」

があり、語り部の一人として、女性が戦争に振り回された苛酷な半生を語られた方がいました。——少女時代の舞鶴での大規模な爆撃のこと、海軍の舞鶴廠工で働いておられた父上が、上司の汚職の濡れ衣を着せられ、無実を訴えても聞き入れられず獄中で自殺されたこと、残された家族は近所の人や親戚からさえも「罪人の家族」として冷たい扱いを受けていたこと、などなのです。Iさんはその方の妹さんで、新春の集いの帰り道々「聞いてもらえますか」と、次のようなことを話されました。「若いときロマン・ロランの小説を夢中になって読んでいた頃のことを今日は思い出しました。私は高校を卒業したら母を助けられると、百貨店や銀行、その他、少しでも給料の良さそうなところの就職試験を受けようと願書を出したのですが、どこも書類選考で不合格なのです。後でわかったことですが、身分調書で家族のことを調べられ、父が獄に入れられていたことがわかったのです。父の無実が晴らされることもなく、世の中は景気が良くなつていくというのに、就職はどこも門前払い。本当に悲しく悔しいでした。このころ、『魅せられたる魂』を読み、泣いていても何も良くならない、前向きに頑張ろう、

そして私たち家族の経験したことを二度と繰り返さないように生きていこうと、心に決めました。主人公のアンネットの生き方から生きる勇氣をもらったのです」。

Aさんのお話にある『女性教養の会』のように、日本が戦争を拡大し、戦時体制に向け国民を厳しく動員しようとしている時代に、宮本先生は翻訳だけでなく、現実の女性が物事を自ら判断でき、自立した豊かな生き方のできる女性になつてほしいという願いをこめ、京都の文化人と協力して立ち上げ活動されたのだと思います。その願いは戦後様々な分野で実をむすんでいったのではないのでしょうか。また、Iさんのお話から、ロマン・ロランの作品を読むということは、私などのあれこれ解釈しがちな「読書」とは質的に異なる、生き方に深く関わる読み方がなされていたと、つくづく考えさせられました。『ジャン・クリストフ物語』の発刊を契機に、ロマン・ロランの作品がこれからの人たちにぜひ読み継がれてほしいものです。

(賛助会員)

『コラ・ブルニョン』 出版一〇〇周年に寄せて

四 宮 ころ

ヴェズレー、サント・マドレーヌ大聖堂。サンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼の始点のひとつであるその地へ、私たちは音楽を携えてロマン・ロラン巡礼に向かいます。

二〇一九年一〇月九日、パリ・ベルシー駅からTERに乗ってブルゴーニュ地方にあるオーセール・サン・ジェルベ駅に到着。そこでクラムシー行きバスに乗り換えます。ちょうど通勤や通学の帰りでしょうか、思いのほか多くのお客を乗せたバスは小さな村から村へ何度も停まりながら森や畑、狭い路地を通り抜けて進みます。少しずつバスはロマン・ロラン生誕の地クラムシーに近づいていました。車窓からは夜の濃紺の空と沈んだば

かりの陽がなす鮮やかなコントラストを背景に、なだらかに続くブルゴーニュの畑の輪郭がまるで影絵のように美しく、流れゆく景色にロマン・ロランがそこに在るような興奮を覚えます。

すっかり暗くなつたクラムシー駅にはロマン・ロラン協会会長リエジヨワ御夫妻が迎えに来てくれました。二〇一七年に御二人が来日されてから約三年、リエジヨワ御夫人の穏やかな笑顔と御主人ピエールさんの大きな手の温もりは何も変わらず、私たちは再会の喜びを抑えることができせん。

今回、私とギター奏者の西垣正信は二〇一九年一〇月

一日から二三日まで開催される「『コラ・ブルニョン』出版一〇〇周年記念（一九一九年）」のシンポジウムとリサイタルのためにこの土地を訪れました。西垣は幼い頃に手にした『ジャン・クリストフ物語』に音楽家としての生き方を学び、その音楽の道を志す途上で困難を助けてくださったのが偶然にも宮本正清氏でした。ロマン・ロランと宮本氏への感謝と尊敬の念は今も絶えることはありません。私はロマン・ロラン研究所での読書会を通じて、ロマン・ロランの文章を読むことに知らされる自身の無知と弱さに対峙しながらもその精神 *Unité* と *Force* を燈明としてなんとか自分を保つことができているように思います。

シンポジウムの前日二〇一九年一〇月一〇日午後、リエジヨワ御夫妻のご自宅があるブレーブ村を訪れました。清らかな水を湛えた川がゆっくりと流れ、生い茂る葉をつけた木々は紅葉を迎えようとしています。小道にはロマン・ロランの名や著書の名前がついた道路標識や村の案内板があちこちに立ち、今でもこの土地にロランやコ

ラ・ブルニョンが生きていると気づかされます。散策の最後、素朴で美しい教会のそばに眠るロマン・ロランとマリー夫人のお墓に参りました。ここに導いてくれた感謝と敬意の念を込めて手を合わせました。

その後、ご自宅でマルティヌ夫人お手製のブッフ・ブルギニョンをいただきました。なんとという美味！今が季節のクルミやチーズなどたくさんのご馳走をいただきながら、まるで『コラ・ブルニョン』の一場面のような楽しい一晚を過ごしました。

二〇一九年一〇月一日、シンポジウムはヴェズレーから始まります。ロマン・ロランが彼の最後を過ごした小さな村ヴェズレー。村の入り口から教会に向う一本の坂道の途中、ロマン・ロラン終焉の家が「*Musée Zervos*」として残されています。一階からピカソやレジェ、二階にはエルンスト、ジャコメッティ、カンディンスキーなど素晴らしい作品が並び、そしてロマン・ロランの部屋へと続きます。そこには愛用されたピアノとテーブルと椅子が置かれ、深い落ち着いた赤い花柄の壁紙があなた

かく部屋を包んでいます。時が止まったままの部屋に射すブルゴーニユの柔らかな光、それはロマン・ロランの意志が今も生きている無言の輝きのようでもありました。

午後六時から『コラ・ブルニョン』出版一〇〇周年記念シンポジウムがSalle Gonthiqueで始まりました。そこにはこれから数日を共に過ごすことになる多くの友人たちが集まっています。ロマン・ロランという共通言語だけで、誰もが人種や国境の壁を軽々と乗り越えてきます。数えきれないほどの感動の出会いに溢れた数日間がこうして始まったのです。

午後八時、サント・マドレーヌ大聖堂 (Basilique de Vézelay) においてギターリスト西垣正信のリサイタルが行われました。プログラムはバッハ「シヤコンヌ」に始まり、ベートーヴェン、そのベートーヴェンへのただならぬ敬意から新しい音楽史の幕を開いたベルリオーズ、ドビュッシー、ラヴェルへと続きます。そしてアンコールとしてロマン・ロランが生涯の師として心を寄せたトルストイの小品「ワルツ」によって、この音楽に満ちたひと時が締めくくられました。

一〇〇〇年を超える人々の祈りが息づく大聖堂の中、ここで祈ったであろうロマン・ロランの魂を蘇らせるかのように、西垣は若きベートーヴェンが書いた美しい四つの小品を演奏しました。まるでロランが『ベートーヴェンの生涯』に記したあの言葉のような輝きを持って――われわれはまことに大きな感動をもって、やがてきたるべき天才的精神のひらめきを、この若い姿の中に感取する！

二日目からシンポジウムの舞台はクラムシーに移ります。クラムシー市庁舎のメインホールで《Colas Breugnot aujourd'hui》と題して一名の研究者による発表が行われました。非常に乏しい私のフランス語で聞く限りですが、クラムシーの地理的観点、方言や言葉のリズム、哲理性、音楽的観点、ロシア語翻訳からの考察など、『コラ・ブルニョン』がこんなにも多面的に味わい深い作品であったことに驚かされる内容でした。夕方、Médiathèque François-Mitterrandでは世界中で翻訳された『コラ・ブルニョン』の出版本の展示が紹介されました。三〇か

国を超える出版が集まっていたように記憶しています。どの本にもその国の雰囲気をつたえたコラ・ブルニョンや登場人物が様々な表情と動きで描かれています。「そうか、当時コラ・ブルニョンは世界中のヒーローだったのかもしれない！」世界各国の出版を前にそんな感動が込み上げたのです。

二〇一九年一〇月一三日、シンポジウムはついに最終日を迎えます。まず朝九時半に聖マルタン教会前に集合。そこから『コラ・ブルニョン』の足跡を巡りクラムシーの町中を散策する Promenade Littéraire (文学的散歩)に出かけました。地理学者でもある案内人の男性の右手にはクラムシーの地図、左手には『コラ・ブルニョン』の本があります。作品の中に出てくる主要な場所を巡り、歴史や地理的考察を踏まえた説明とともに小説の朗読をしてくれるのです。綺麗に晴れた空の下、なんと贅沢な散策でしょう。男性が手にする小説はもう何万回もページをめくったように膨れ上がり、引かれたマーカアの跡々と折られたページが今でも愛おしく思い出されます。

たっぷり二時間の散策を終えてロマン・ロランの生家であるMusée d'Art et d'Histoire Romain Rollandに移ります。この日は特別に Gabriel Belot 氏による挿絵入りの『コラ・ブルニョン』原本(一九二二年)とポーランド人画家 Stanislaw Sobolewski 氏による小説『コラ・ブルニョン』を描いた一〇枚の絵が紹介されました。夕刻には、聖マルタン教会で Dimitri Kabalevski 作曲・オペラ「コラ・ブルニョン」の素晴らしい上演によって全てのシンポジウムの幕が閉じられました。

報告のまとめとして、ヴェズレー・ブレーブ・クラムシーで過ごしたこの数日間はロマン・ロランの人生を辿りつつも『コラ・ブルニョン』の当時の舞台に飛び込んだようでした。作品と実を超えてどちらの精神に寄ったとしても、いつも人間愛への純粹果敢な戦いと深い愛にぶつかります。そしてロマン・ロランの作品を読む毎に私は自らに問うことがあります。「彼らのように生き生きと人間的であること。その深さと幅は世界の進化によってより実現されているのだろうか」それは自分自身

への戒めでもある問いです。ロマン・ロラン、コラ・ブルニヨン、そして多くの友人たちの内にある同じ光こそがその解なのでしょう。彼らの存在を心に留め、自身を鼓舞する力に変えていきたいと念じます。

最後に、この数日間の特別な物語を共に過ごした多くの友人たちに心からの感謝と限りない友情への願いをここに記します。そしてこの場をお借りして、今回私たちをこの土地に導いてくださるために数多くのご助力をくださったりエジヨワ御夫妻に厚く御礼を申し上げます。

(理事)

ベルナール・デュシャトレ先生 追悼

宮本 エイ子

『ロマン・ロラン伝』の著者デュシャトレ先生がお亡くなりになった。フランス国立図書館に収蔵されている公開、非公開の日記、書簡など膨大な資料を駆使して発刊した *Roman Rolland tel qu'en lui même* (二〇〇二、アルバン・ミシエール社) — フランス学士院倫理・政治学アカデミーの文学賞 — はこれまでのロマン・ロラン像を一新した。この『ロマン・ロラン伝』(村上光彦訳) はみずす書房で刊行され、二〇一四年には出版記念会が開催され記憶にも新しい(「ユニテ」四〇号を参照)。

先生は一九、二〇世紀フランス文学について一九六八年から一九九五年までブレスト大学で教鞭をとった。フランス国立科学部門に属する一九一二〇世紀書簡研究センターを学内に創設し、大学定年(名誉教授)後もロマン・ロランだけでなくマルタン・デュ・ガールなどの書簡集の編纂、研究に精力的に活動された。

日本との関係では、ロマン・ロラン没後五〇年(一九九四)を記念するシンポジウムのさいに、特別講師として先生を夫人とともに京都にお招きした。母国フランスからロランの思索の豊富な源泉を極東のロランの家にもたらしにくれた。日本の研究者や愛好家と親しく交流する機会は肉親のような連帯感となった。それは未曾有の災害、阪神・淡路大震災の起こる三か月前のことで、「苦しさを生きる力」に転換するロランのテーマを再確認する機会ともなり、

私たち関西人には生きる勇氣につながった。昨日のことに鮮明に浮かんでくる（「ユニテ」二二号を参照）。

私が初めて先生にお目にかかったのは一九七六年、ロマン・ロラン国際会議に出席する夫宮本正清に同道したときであった。『ジャン・クリストフ』で学位論文を出された直後のデュシヤトレ先生を、期待のロラン研究者としてロラン夫人から紹介されたのであった。爾来、正清亡き後も変わらず先生はご自身の発表される冊子や研究書のほとんどを京都へ送ってくださった。ジツドやデュアメル、ペギー、クローデルについて、またロランとソ連との関係、あるいは人種、民族を越えた有名無名の多彩な人々との書簡集、そしてロランのもっとも重要な音楽や宗教、社会活動をテーマにした核心に迫る研究論文・著書など、すべてがロランを知るうえで欠かせないものばかりであった。なかでも印象的だったのは、ロランの晩年の貴重な書簡集で、そこには死の直前まで続く地元の音楽家教師との響き合うような熱い交流が描かれていた。一九四四年、ロラン夫人とその母がクリスマススイブ、ミサに教会へ行った留守のとき、訪問者である若い音楽家の肩を借りながら「私たちのミサをあげよう」といって自らベートーヴェンの「ピアノソナタ ハ短調作品一一一番」を弾いた。まるで遺言のように、ベートーヴェンへの思い入れを、魂あるいは霊的信念の表現の極限まで高め昇華した情景である。

私たちは先生からどれだけ多くのことを学ばせていただいたことか！ ほんとうに悲しくさみしく辛い。もうご指導いただけないと思うとこみあげてくるものがある。フランスのロラン協会について言えば、名誉会長としてリエジヨワ会長の大きな支えとなったことは言うまでもない。その喪失は筆舌に尽くしがたい。

翻訳されている書物は、先に言及した『ロマン・ロラン伝』だけである。他方、ロラン宛ての神学生からの手紙から始まるデュシヤトレ先生編 *Au seuil de la dernière porte* は「最後の扉の敷居で」として「ユニテ」（二二号―三九号）紙上に村上光彦先生が解説されていたが、——そこではロランの宗教観がうかがえる——、残念ながら村上先生のご逝去でもう少しのところまで未完に終わっている。

ロランの日記が解禁された一九九七年、私はフランスの国立図書館に所蔵しているロランの手書きの日記などを閲覧に行ったとき、先生ご夫妻からお招きをいただき、ブレストの紫色のアジサイが咲くお住まいをお訪ねした。ロランのことなど私の質問に対して懇切丁寧にお答えくださったうえ、厚いおもてなしに与った。また「自分たちは地方住まいだが、長男のオリヴィエとその家族はパリにいますので、パリへ滞在したら必ずオリヴィエに連絡するように」ともおっしゃってくださった。やがて私のパリ通過をオリヴィエ家族も楽しみにお待ちくださるようになった。瀟洒なアパルトマン、オリヴィエ夫人のお手料理、中産階級の住まいと家族の温かい連帯感も直接触れる機会をくださった（一九九七年一月二五日京都新聞に「ロマン・ロランを求めて」として、紀行文掲載）。

そのオリヴィエから最近、恐れていた訃報が届いたのだった。というのはいづい二カ月前、先生からいただいたお手紙がこのオリヴィエの代筆によるものであったから。（二〇一九年五月二日付）

悲しい知らせです。

「父は復活の喜びのなかで安らかに眠りにつきました。父は苦しむことなく私たち三人の子供に見守られて消え入るように静かに逝きました。私たちは一〇日ほど前から父に寄り添っておりました。前立腺癌で衰弱しきり入院を余儀なくされました。その間父は悟ったようでした。お迎えはそう遠くなく来るだろうと、イエス・キリストのもとへ行くことを。父とそのことを話しあいました。父はこういったのです。「私はほっとした。すっきりした。私をとがめるものは何もない。神は存在する」。私たちの「徳の一つである希望」を持つてしても、いまだ別れを受け入れられず悲しみに沈んでおります。父は見事な遺言を残しました。彼岸へ至る信仰は確たるものでした。永遠の神秘の路上で、すでに母に、そして父が愛したすべての人々、もちろんロマン・ロランにも出会っていることでしょう。そしてもっと高いところから私たちをずっと見守ってくれるでしょう」。

ロラン研究の大家、デュシャトレ先生はご自分の信仰によってイエス・キリストのもとへ旅立たれたのである。先生は最期に、生きるうえで最も大切なこと、「信仰」について教えてくれた。「イエス・キリストのもとへ行く」のだという安心感。死は誰もの道であればこそ、この来世観に私も救われた思いである。

デュシャトレ先生は、生前、ロランとキリストとの関係について「ロランはやはりキリストに忠実でキリストの弟子であると思っている。キリストは神ではないとしても、人間の最良のところを最高にまで高めた人間なのである。彼は命の光なのである」と言及されている。

クローデルのカソリック信仰に最後まで説得されなかったロマン・ロラン。デュシャトレ先生は、ロラン研究者として心情的に対象物ロランに同化され追隨することなく、冷静に論理的に仕事を分析した真のロラン研究者であった。

思い起こせば、ほぼ半世紀まえに遡る。

パリからヴェズレーへ向かう軽乗用車、助手席にはロラン夫人、後部の二人座席は無理やり詰め込まれた三人、わたしたち夫婦の隣には首ひとつ飛び出た体を斜めにした中年男性、彼こそがデュシャトレ先生だった。

所要時間三時間余り、古びた車はつぶれないかと気が気ではない。それ以上にフランス人独特の騒々しいおしゃべりで吹っ飛ばされそうだった。甲高い声のロラン夫人、そして男性三人が加わり、呼吸するスペースさえ失われた思いだった。それでも新鮮なフランス体験に私はわくわくした。予期せぬ異文化体験は極上の楽しさだった。デュシャトレ先生たちとお会いすると決まって口にするのは、奇想天外なロラン夫人のことだった。その都度、顔をお見合わせてウインクし苦笑する仲間でもあった。先生に最後にお会したのは国際会議の二〇一六年だった。フランス人らしい健啖家で、ワインを片手にご一緒したにぎやかな食事が今も懐かしく思い出される。

哀惜、敬愛そして感謝をこめて。心からご冥福を祈ります。

(業務執行理事)

短 信

*林光子さん この度は「ユニテ」四六号をお送りくださ
いましてどうもありがとうございました。いただきました
「追辞」を胸いっぱいになりつつ亡夫の仏前に開いて備え
ております。今年は友の会設立七〇周年、そして『ジャン
クリストフ物語』の発刊と大切なおめでたい節目の年とな
りますことをお祝い申し上げます。ロマン・ロランに若い
時から心を寄せてきました亡夫が貴会の片隅に学び、ひと
ときの場をこの上ない喜びと幸福の気持ちとともに過ごせ
ましたことを心から感謝いたします。ロランの書物のどの
頁も線引きがありたくさんの書が残されました。孫に引き
継げますれば良いのですが、貴会が盛んでありますことを
念願申します。どうもありがとうございました。北の地は
新緑の季節となりました。

*徳永勲保さん 藤原書店の「機」No.三二六 立川幸一氏
の文章の中にロマン・ロランについて言及しています。つ
ぎのとおりです。

「歴史学に民衆の視点を導入した初の歴史家、ミシュレと
は何者か？ ミシュレはいかにして誕生したか——一歴史
学とミシュレから何を学んだか——立川幸一

フランス革命とは何か

わたくしとフランス革命との出会いはミシュレとの出会い
より早く、大学受験より早く、大学受験の直前一九六七年、
私はなぜか教科以外の本を読んでいた。ロマン・ロランの
『フランス革命劇』『愛と死の戯れ』など八作はさすがに文
学なので、ダントン、デムーラン、ロベスピエールといっ
たおなじみの人物が登場してくる。その中で有名人はいな
いものの、戦線における軍と革命委員との緊張関係を描い
た『狼』という小品は愛国心(革命利益)と正義(人道)が
真正面ぶつかり合う問題提起のドラマで私は戸惑い、茫然
としてロランの問いかけにこたえることもできず、いわば
生きることの謎にぶちあたった、人生経験に乏しい自身の
無力を感じるほかほかだった」

*中田裕子さん 武漢でコロナウイルス肺炎が流行して大
変なことになっているというニュースを知ったのは昨年末、
それが三月にはパンデミックにまでなっていました。

人のいなくなった索漠としたパリやミラノやニューヨーク
の風景をテレビで見て、人の移動が止められた町の空し
さを痛感した。

学校の休校、不要不急の外出やイベントの自粛が要請さ
れ、私たちも在宅しているより仕方がない毎日だ。ロマン・
ロラン研究所の三月例会「読書会」も急遽中止をせざるを
得なくなつた。バスの中で咳が出るとコロナではと疑いの

眼が向けられ、また近くで咳をする人に会うと自分自身も同じような恐怖を感じてしまう。気づかないうちに感染したり感染させられたりするという新型コロナウイルスは人々に疑心暗鬼を生じさせてしまう。感染症はあつという間に拡大して人々をパニックにする。

ふと、カミュの小説『ペスト』を思い出した。閉鎖された町で人々は、いろんな考えの人があつたが、最終的にはペストの猛威はみんなに関わる災難であると考え、個々の苦しみを超えて団結して立ち向かった。そして多くの犠牲をはらった後に通常生活を取り戻した。

私に今出来ることとしては丁寧な手洗いと外出時のマスク着用ぐらいしか思いつかない。しかし感染症を終息させるために大切なことは、些細なことでも各人皆が出来ることをしっかりとすることだと思う。世界中で治療薬やワクチンの開発が進んでいると聞く。早くこの感染が終息して日常を取り戻したい！ 新型コロナウイルスで閉鎖されている図書館が再開されたら、『ペスト』をもう一度読んでみたいとも思っている。

読書会報告

三六七回―三七五回 例会 友の会から数えると五五二回を終了。原則第四土曜日 午後二時―四時

ところ ロマン・ロラン研究所

『ジャン・クリストフ』第五卷「広場の市Ⅱ」―

第七卷「家の中」第一部

要約と朗読、関係の音楽をCDで聴く。

二〇一九年四月二七日、五月二五日、六月二二日、

八月二四日、九月二八日、一〇月二六日、一二月二二日、

二〇二〇年一月二五日、二月二二日。今年度通算参加者

八〇人

十 訃報十

梅原 猛さん

二〇一九年一月一二日死去。享年九四。賛助会員梅原ふささんの夫、哲学者、文化勲章受章者。日本ペンクラブ第一三代会長、国際日本文化研究センターを設立して所長、京都市立芸術大学学長など歴任。京都の学術や文化の中心的存在。京都市名誉市民。梅原猛著作集など著書多数。合掌。

日野 二三代さん

二〇一九年四月五日死去。享年九九。宮本エイ子の母。研究所設立者正清の看護に始まり、その後は四〇年近く、研究所の玄関から門口まで清掃などを一手に引き受けてきた。雑用の一つ、郵便物の投函では雨の日はポストの口を布でふいてから投函する気づかいを忘れなかった。感謝。

ベルナル・デュシャトレさん

仏国プレストにて二〇一九年七月六日死去。享年八九。追悼文掲載。

財団法人ロマン・ロラン研究所設立趣意書

設立者・初代理事長 宮本 正清

ロマン・ロラン（一八六六—一九四四）は、日本人にもっとも強く深い、精神的、道徳的影響を与えたヨーロッパの芸術家の一人であります。武者小路実篤、志賀直哉等の白樺派の人々をはじめ、高村光太郎、尾崎喜八、大仏次郎、小島政二郎その他の作家、音楽家、画家、彫刻家、さらに科学者、実業各方面にいたるまで、その青春時代をロマン・ロランの思想、芸術の光に照らされ、人格的感化陶冶を受けた者は枚挙にいとまないのであります。

しかし、ロマン・ロランの眞の偉大さと、存在価値は、たんに文学的分野にとどまるのではなく、むしろその博大な人間愛にあります。人種、文化、文明等のあらゆる国境を越えて、眞に世界的、人類的である彼の愛の精神は、「ジャン・クリストフ」「魅せられたる魂」その他の小説、戯曲、伝記、文学的、音楽的、歴史的研究のみならず、現代社会のあらゆる不正と戦うために、人権と自由を擁護するために、多くの政治的、社会的論争を生涯つづけました。さらに、ロランは、東洋と西洋、ヨーロッパとアジアとの相互理解、信頼、尊敬と両者の協力が、人類の進歩と平和のために、いかに必要であるかを説き、われわれの文明を墮落と頽廢から救いうる唯一の道は、アジアとヨーロッパが、あたかも車の両輪のように支持し合い、各人種、各国民がユニークな文明、固有の伝統を尊重、保存して、人類全体の偉大な共有財産として、現存のそれに勝る大文明を創造すべきだと言っております。ロランは、インドの哲学、宗教を研

究した数巻にわたる著述の中で東洋の精神のもっとも深遠で高邁なもの、西洋のそれと本質的に異なるものでないばかりか、両者がほとんど完全に一致していることを実証しております。このような思想家、芸術家、偉大な人間が、わが日本において、半世紀以上にわたって、変ることなく、今もなお、青年層に親しまれ、愛読され、尊敬されていることは、日本のために、喜ぶべきことと信ずるのであります。

一九七〇年十二月

◆現在の主な三つの活動

ロマン・ロランセミナー

公開講座

- 講演会
- 読書会・研究会
- 機関誌『ユニテ』発行

◆ロマン・ロラン研究所賛助会員について

- ロマン・ロランの著作に感動、また
 - 彼の周辺の芸術家たちに興味、
 - あるいは、ロマン・ロラン研究所活動に共感
- いずれの理由でも結構です。皆様のご賛同をお待ちいたしております。

●特典Ⅰ①機関誌『ユニテ』の配布。②賛助会員の参考に資する情報、資料等の提供。③公開講座無料。

●会員Ⅰ一般賛助会員は年会費一口五千円から。特別賛助会員は年会費十口以上。

ロマン・ロラン研究所の活動

一九七一	5・15	ロマン・ロランと日本の青年（映画『ロマン・ロラン』上映）	宮本 正清	4・20	ロマン・ロランの反戦思想と現代	加藤 周一
	11・27	苦悩のなかのインド	森本 達雄	6・9	ロマン・ロラン全集と私	小尾 俊人
一九七二	6・24	ロマン・ロランとフランス革命	波多野茂彌	9・29	ロマン・ロランの革命劇から——フランス革命二〇〇周年の記念に	中川 久定
一九七三	5・26	ロマネスク美術 ブルゴーニュ地方の教会を中心にして	高井 博子	11・17	ロマン・ロランとの出会いから	尾埜 善司・今江 祥智
12・18		私の人間観	末川 博	1・27	ロマン・ロランに負うもの——平和と音楽	新村 猛
一九七四	6・29	私の通った芝居の道	毛利 菊枝	6・2	ロマン・ロランとガンディー	森本 達雄
12・5		ロマン・ロラン没後三十周年記念——講演と音楽の夕べ	佐々木斐夫	9・26	『魅せられたる魂』と私	樋口 茂子
			演奏…玉城 嘉子	10・26	占領時代における日本社会とロマン・ロラン	小尾 俊人
一九七六				11・30	ロラン・片山・ヘッセ	宇佐見英治
7・11		ロマン・ロランとゲートル ユダヤ民族と西洋文明	南大路振一 岡本 清一	一九九一 3・1	ロマン・ロランと私	松居 直

4・19	(財) ロマン・ロラン研究所設立二十周年記念 レクチャー・リサイタル ベートーヴェン後期ピアノ・ソナタの夕べ	杉田 谷道	10・15	『魅せられたる魂』を語る(後)	重本恵津子
6・4	ロマン・ロランとベートーヴェン	青木やよひ	1・28	いま、ロマン・ロランを語る	尾埜 善司・今江 祥智
9・27	ロマン・ロランとデュアメル	村上 光彦	9・9	ロマン・ロランと音楽	中野 雄
10・25	ロマン・ロランの思想の二面性	兵藤正之助	10・14	神秘と政治 ロマン・ロラン、その思索と行動の	
11・29	初めにロマン・ロランあり	岡田 節人		あいだ	B・デュシャトレ
一九九二				ロランとフランス革命	河野 健二
6・26	(大洋感情)と宗教の発端	岩田 慶治		自然科学とゲーテ	岡田 節人
9・25	ロマン・ロランとイタリヤ	戸口 幸策	12・3	ロマン・ロランとドイツ音楽	岡田 暁生
10・30	ロマン・ロランの革命劇をめぐって	鶴見 俊輔		ベートーヴェン、デュカ他作品	
11・27	宮本正清 没後十年記念追悼会			ピアノ演奏…小坂 圭太	
	静かにやさしき顔	山田 忍	12・24	おはなし「ピエールとリュス」と「また逢う日まで」	今江 祥智
	不思議な静けさ―宮本正清の世界	佐々木斐夫		で	
		小尾 俊人		映画上映「また逢う日まで」(監督 今井 正)	
一九九三			一九九五		
1・29	自伝的諸作品について	佐々木斐夫	1・27	ロマン・ロランと日本人たち	小尾 俊人
1・29	ロマン・ロランの演劇的世界	石田 和男	6・2	私の歩んだフランス文学の道	片岡 美智
5・24	ガンディーとロマン・ロラン	山折 哲雄	11・10	ロマン・ロランとR・シュトラウスの周辺	岡田 暁生
6・23	『魅せられたる魂』を語る(前)	重本恵津子			

一九九六	ロマン・ロランとの出会いから	鄭 承姫	10・30	ロマン・ロラン記念コンサート	
6・14	レクチャーコンサート	岡田 暁生		ピアノ演奏…小坂 圭太	
11・16	ベートーヴェン…ピアノソナタ 第21番、28番	岡田 暁生	11・25	レクチャー…岡田 暁生	
	ピアノ演奏…北住 淳		一九九九	ロマン・ロランと大佛次郎	
11・18	「戦間期のリベラル」経済学から見たロマン・ロラン	本山 美彦	6・11	ロランと音楽	岡田 暁生
一九九七	「主体的精神と普遍的人間愛」ロマン・ロランと	區 建英	12・1	「日本ロマン・ロランの友の会」五十周年記念	園田 暁生
1・17	魯迅	岩淵龍太郎	二〇〇〇	園田高弘ベートーヴェンを弾く	園田 高弘
6・6	わが青春と一生	福田 真人	10・13	お話とピアノ演奏	森本 達雄
9・19	ロマン・ロランと結核の時代	福田 真人	二〇〇一	ロマン・ロランとインドの精神	佐々木斐夫
10・4	ピアノとチェロのための夕べ	ピアノ演奏…北住 淳	2・23	ロマン・ロランと〈老いの豊かさ〉	青木やよひ
	ロマン・ロラン記念コンサート	チェロ演奏…小川剛一郎		シンポジウム	今江 祥智
一九九八	ロマン・ロランと種蒔く人	柏倉 康夫	6・23	(財)ロマン・ロラン研究所設立三十周年記念	尾埜 善司
6・8	ロマン・ロランと政治的魔術からの解放	柳父 図近		コンサート	神谷 郁代
9・25				神谷 郁代	ベートーヴェンを弾く

12・21	ロマン・ロランとヴィクトル・ユゴー		二〇〇四	『きょう』を読む『京都、半鐘山の鐘よ 鳴れ!』
		デイ・デイ・エ・シツシユ	5・29	朗読とおはなしの会
二〇〇二				
4・20	ロマン・ロラン記念スプリングコンサート			おはなし 尾埜 善司 朗読 村田まち子
	ヴァイオリン演奏…ピエール・イワノヴィッチ		7・16	ロマン・ロラン記念サマーコンサート
	ピアノ伴奏…郁子・イワノヴィッチ			ヴァイオリン演奏…ピエール・イワノヴィッチ
11・11	ロマン・ロランの後継者たち	蛭川 謙	9・11	ピアノ伴奏…郁子・イワノヴィッチ
二〇〇三				抗日中国における中仏文化交流
4・19	ロマン・ロラン記念スプリングコンサート			中国の知識人はロマン・ロランをどのように評価したか
	ヴァイオリン演奏…ピエール・イワノヴィッチ			内田 知行
	ピアノ伴奏…郁子・イワノヴィッチ		二〇〇五	
5・10	ロマン・ロランの作品による音楽とレコード	尾埜 善司	1・29	現代の法とヒューマニズム
		沖本ひとみ		加古二郎と瀧川事件
				ロマン・ロラン没後六十年記念コンサート
5・31	戦争と平和、科学を考える		6・12	梅原ひまり 神谷郁代デュオ
	ブリーモ・レーヴィを語る			ヴァイオリン演奏…梅原ひまり
		ジル・ド・ジェンヌ		ピアノ演奏…神谷 郁代
		解説 西成 勝好	6・25	生々発展する魂
11・22	ロマン・ロランを読みながら 今の世界を考える	峯村 泰光		ゲートとベートーヴェンそしてロマン・ロラン
				青木やよひ

- 10・29 交差する肖像
 ロマン・ロランとクロードル
 J・F・アンス
 通訳 原口 研治
 11・13 中国研究を通しての日仏交流
 京大シノロジーの創始者狩野直喜の場合
 狩野 直禎
- 二〇〇六 戦間期ヨーロッパとロマン・ロラン
 山口 俊章
 二〇〇八
 3・8 『ピエールとリュース』を演出して
 今藤政太郎
- 二〇〇七 日本におけるロマン・ロラン受容史
 デイ・デイエ・シツシユ
 通訳 シツシユ 由紀子
 6・28 中国におけるロマン・ロランの紹介者・傅雷
 榎本 泰子
- 1・20 琴 笙 ヴァイオリンによる新春コンサート
 大谷 祥子
 9・16 前理事長尾埜先生への感謝の会・記念講演
 ロマン・ロランと日本人たち
 尾埜 善司
- 2・3 歌と朗読の会
 豊 剛秋・増永雄記
 10・4 ロマン・ロラン国際平和シンポジウム
 宮本正清の詩『焼き殺されたいとし子らへ』
 「わらい」朗読
 尾埜 善司
- 7・21 朗読の会
 第一次世界大戦とロマン・ロラン
 尾埜 善司ほか会員
 フランソワ・ラベット
 ロマン・ロランが愛したベートーヴェン
 ピアノ演奏…神谷 郁代

二〇〇九

朗読の会とピアノ演奏『ジャン・クリストフ物語』

ピアノ演奏…岩坂富美子

朗読…下郡 由ほか

6・13

「日本ロマン・ロランの友の会」六十周年記念

レクチャー・ギターコンサート

9・30

フリー・ツォン ピアノリサイタル

二〇一〇

小林多喜二とロマン・ロラン——反戦・国際主義の文学を求めて

9・29—10・3

一九五三年のフランスの子供の絵特別出品(京

都市幼児・児童・生徒作品展及び姉妹都市交歓

作品展)

10・9

ピアノリサイタル

二〇一一

朗読の会 トルストイ没後一〇〇年記念『トルストイの生涯』『伯爵様』

会員たち

二〇一一

11・19

フロイトとロラン——災厄の後に、幻想の前で

二〇一二

1・27

「ロマン・ロラン伝」翻訳・出版記念会

小尾俊人氏へのオマージュを込めて——京都会場

講演「ジャン・クリストフ」を読みかえして

村上 光彦

ロマン・ロランとみず書房と小尾俊人さん

守田 省吾

3・5

朗読の会

スピーチ フィリップ・ジャンヴィエ・カミヤマ

3・29

『ロマン・ロラン伝』翻訳・出版記念会

女たちの祭典・ワークシヨップ『魅せられたる魂』

アンネットとシルヴィ

会員たち

小尾俊人氏へのオマージュを込めて——東京会場

琴とヴァイオリン合奏

琴…大谷 祥子 ヴァイオリン…白須 今

『春の海』 宮城道雄 作曲

『夢のあと』 フォーレ 作曲

7・28

朗読の会『魅せられたる魂』

アンネットとシルヴィ

於 ロマン・ロラン研究所

10・20

ロマン・ロランと賀川豊彦

濱田 陽

二〇二三

6・22

ヴィヴェーカーナンダ生誕一五〇周年記念

スワミー・ヴィヴェーカーナンダの生涯と

メッセージ

スワミー・サティヤローカーナンダ

7・6

〈朗読とピアノ〉 オマージュ宮本正清

〈朗読〉 『戦時の日記』 『ジャン・クリストフ物語』

詩集『焼き殺されたいと子らへ』

朗読 会員たち

〈ピアノ〉

岡田 真季

作曲 ポール・デュパン

曲目 『ジャン・クリストフ』

11・16

世界遺産ヴェズレー ロマネスク芸術の宝庫

アンドレ・アンジェイ・グルシエフスキ

二〇一四

9・26 シター演奏と朗読

シター演奏

中川 啓子

朗読 『ピエールとリュース』など 会員たち

11・1

第一次世界大戦一〇〇年とロマン・ロラン没後七〇年記念 I・F〈読書の秋〉共催

第一次世界大戦下の知識人——アランとロマン・

ロラン

久保 昭博

二〇一五

9・19 戦後七〇年と憲法九条の意義

曾我部真裕

11・28 ロマン・ロラン〈聞き手として〉、証人として

『ヴェズレー日記（一九三八—一九四四）』をめぐる考察

デイデイエ・シツシユ

通訳 シツシユ 由紀子

二〇一六

ロマン・ロラン生誕一五〇年&財団法人設立四五周年記念事業

10・8

朗読会 読んで聴かせる『ジャン・クリトフ』

——ピアノ演奏付き——

- 朗読 村田まち子ほか会員
 ピアノ 岩坂富美子
 講演会 ガンディー&ロランの存在から今の世界
 を読み解く
 宗教学者、山折哲雄先生に聞く
 山折 哲雄
 聞き手 濱田 陽
- 二〇二七
 1・28 コンサート 箏とギター、ヴァイオリンとチェン
 バロで聴くベートーヴェン
 大谷 祥子、西垣 正信
 大谷 玲子、塩地加奈子
 会場 金剛能楽堂
- レセプション 京都ガーデンパレスホテル
 戦争と文学 桑原武夫「第二芸術論」から見た戦
 後日本 大浦 康介
- 12・9 ロマン・ロラン、二〇世紀におけるユゴー的作家
 デイ・デイ・エ・シツシユ
- 二〇一八
 6・9 日本国憲法の立憲平和主義と自民党改憲草案の間
- 10・20 ポール・クロードル生誕一五〇年記念「ユニテと
 共同出生」 山内 敏弘
 中條 忍
- 二〇一九
 日本ロマン・ロランの友の会七〇年記念
 10・8 イリーナ・メジューエワ ピアノリサイタル
 ベートーヴェンを弾く
 イリーナ・メジューエワ
 イリーナ・メジューエワと西成理事長の対談付き
 会場 京都コンサートホール
 時代の流れにあらがって——大河小説の可能性
 野崎 敏
- 11・30

二〇一九年度 賛助会員、寄付者名簿

(アルファベット順・敬称略) *特別会員及同等寄付者

安倍 道子 阿部 力 有馬通志子

シツシュ・D・由紀子 福田 幸子 福田 由美

古家 和雄 古田 武司 五島 清子 長谷川和宏

*長谷川治清 早川工務店(早川 友一) 濱田 陽

林 千恵子 日野二三代

(一財)本願寺文化興隆財団理事長(大谷 暢順)

池垣 勇 今西 良枝

*稲畑産業株式会社(稲畑勝太郎) *稲畑 勝雄

石川 梢一 *伊藤 朝子 井土 真杉 *井上 幸子

岩坪嘉能子 加茂 宣子 加藤富美子 河合 綾子

木下 洋美 清原 章夫 金剛 育子 金剛 永謹

小西 卓明 久保 建夫 久保 久子 黒柳 大造

松田有美子 峯村 泰光 *宮本エイ子 森本素世子

*森内依理子 守田 省吾 村上 葉 室谷 篤男

村田まち子 村山香代子 永易 秀夫 永田 和子

中村 信子 *中田 裕子 西村 秀美 西村 昭子

西村七兵衛 *西成 勝好 西尾 順子 野村 庄吾

乗金 瑞穂 能田由紀子 岡部 素行 大川起示子

*沖本ひとみ 奥村 一彦 奥村 令子 小尾 眞

折田 忠温 大谷 祥子 ロマン・ライフ(河内 誠二)

酒井 保子 坂谷 千歳 佐久間啓子 佐々木雅子

志賀 鍊三 下郡 由 所司 育代 園部 逸夫

鈴木 明子 高砂子通子 田間 千晶 谷口 景子

谷口 良則 田代 輝子 田谷 昭夫 徳永 勲保

東野 孝人 月ヶ洞晶子 上原 栄子 植松 晃一

上西 妙子 馬木 絃子 梅田 菊代 梅原 ふさ

和田 義之 八木美佐子 安木由美子 山口 千鶴

山本 和枝 山下 雅子 柳父 関近 柳田 基

寄贈図書

フランス ロマン・ロラン協会

1、冊子 二〇一九 カイエ四三号、二〇二〇 カイエ四四号

2、Romain Rolland *Vie de Beethoven*, préface de Jean Lacoste, Omnia Poche, 2019

3、新聞切り抜き ロマン・ロラン活動状況 *le Journal du Centre* mardi 4 février 2020

• Prf. Bernard Duchatelet Romain Rolland, *Voyages en Bourgogne 1913-1937*, textes éditées par Bernard Duchatelet, Éditions universitaires de Dijon, 2019

• 日本近代文学館 日本近代文学館年誌

資料探索 二〇二〇・二二

• 長谷川治講 ASIAN BUSINESS AND MANAGEMENT THEORY, PRACTICE AND PERSPECTIVES EDITED BY HARUKIYO HASEGAWA/MICHAEL A. WITT

• イリリーナ・メジューエフ氏 cd ネーター・ヴェン

・ショノンナタ 三〇、三二、三三

• 植松晃一氏 フランス・マスレール版画「ロマン・ロランを讀ませて」

• 柳父罔近氏 内村鑑三研究第五二号 無教会における「天皇制」観の展開——象徴天皇の「代替わり」に考える

• 後藤光治氏 個人詩集「アピラ」ロマン・ロラン断章

• 西成勝好氏 *Jean, Christophe de Romain Rolland présenté aux Enfants par Mme Helier-Malaurie*, Albin Michel, 1932

『ユニテ』編集を終えて

『ユニテ』47号をお手元にお届けします。

「人生の大河を描くことは、世の流れに流されない精神の発露であり、抵抗する人間への賛歌であったのです。そこには今のわれわれにとっても切実な呼びかけがあります」。本号巻頭に掲載した野崎敏先生の『ジャン・クリストフ』『魅せられたる魂』読解からは、じつに多くを学ぶことができました。歴史の中にロランの作品を位置づけて考えること、時間的なことや日常の細部を描くなど、リアリズム小説の約束を無視して描かれる大河小説のあり方、作品自体のもつ音楽性、なぜ今日のフランス文学研究がブルーストにばかり目が向けられるのか、など。現在を生きる私たちが過去の文学作品を読むとはどういうことなのか、その意味と可能性に思いをめぐらせたいです。

「世の流れに流されない精神の発露」は、今こそ大切かもしれません。新型コロナウイルスが生んだ現在の状況は、終息して原状復帰とはならないでしょう。未来予想図を考えることも重要ですが、感染恐怖とソーシャル・ディスタンスに関係して、私たち一人ひとりの自己保存が他人への排除につながる可能性があることだけは、こ

こに記しておきたいと思います。今号の表紙には、ロランの顔を中央に多くの手が交わされるマスレールの版画「ロマン・ロランを讀えて」を選びました。人と人とのつながりや連帯の願いをこめて。
(守田省吾)

編集部

守田 省吾 中田 裕子
宮本エイ子 清原 章夫
シツシユ 由紀子

ユニテ 第四十七号

発行日 二〇二〇年五月十五日

発行者 一般財団法人

ロマン・ロラン研究所
理事長 西成 勝好

京都市左京区銀閣寺前町三二

電話・FAX

(〇七五) 七七一―三二八一

郵便番号 六〇六一八四〇七

郵便振替振込口座番号

〇一〇五〇―九一五九九九六

印刷所 (株) 北斗プリント社

URL <http://www2u.biglobe.ne.jp/~rolland/>
E-mail rolland-miyamoto@mtf.biglobe.ne.jp

U N I T É

Sommaire

- À contre-courant de l'époque: les potentialités du roman-fleuve Kan NOZAKI
- À propos de Romain Rolland: quelques échanges entre Katsuyoshi NISHINARI,
président de l'Institut Romain Rolland de Kyôto, et Irina Mejoueva, pianiste,
à l'occasion du récital de piano organisé le 8 octobre 2019 dans le cadre du 70^e anniversaire
de l'Association des Amis de Romain Rolland au Japon
- À l'occasion de la publication de la nouvelle version pour enfants de *Jean-Christophe*:
À la recherche d'un exemplaire de la première édition de *Jean-Christophe* illustrée
par Frans MASEREEL;
Réflexions sur la nouvelle version Kouichi UEMATSU
- En recommandant la lecture de *Jean-Christophe*... Hisako KUBO
- À l'occasion du centenaire de la publication de *Colas Breugnon* Kokoro SHINOMIYA
- Hommage au Professeur Bernard Duchatelet Eiko MIYAMOTO
- Compte rendu des activités de l'Institut Romain Rolland
- Activités et objectifs de l'Institut Romain Rolland
- Annuaire 2019 des membres et donateurs
- Postface